東海道名所圖會

五

東海道名所圖會卷之五

目錄

○吉原
富士山　竹取物語　朝鮮人詩稿　琉球人詩稿　賴朝細妓牧寺圖
田子浦　書紀　勅撰古今集　東勢物語　更科日記　俳諧古今抄　曾我夜討畫
手児呼阪
白隱禪師蹟　松蔭寺　白隱行狀畧記
興國寺古城
竹下道
足柄神祠
八重山
車返
○滋津
師歯迫山
井出館舊趾　都良香富士記　万葉古詠　義楚六帖　羅山丙辰紀行　十六夜日記　神社考　史記　曙樓文集　富士賦
足柄関
富士人穴
○原
元吉原　鎧名
富士鳴澤
要石　白隱語錄
左不二
芝瀬川
阿野細江
愛鷹山
阿野禪師古跡
横走関
新羅三郎秘曲傳授
丸子神祠
千本松原　戎神祠
富士隠
亀鶴墳

常格舍藏書印

黄瀬川　宗祇終焉地
千貫樋　駿豆兩國堺
別宮八社　○三嶋　三嶋神社　本社　末社
神馬　池　舞臺　隨身門　神馬厩
馬場　祭園　鳥部屋　走湯山　富士見平
興小島　藥師堂　寶藏　二天門　三層塔　神供所
風越臺　○箱根　古々井杜
曾我兄弟墳　虎墳　庚申墳　山中古城　豆相兩國堺
箱根温泉　藥師堂　大師堂　親鸞聖人堂　生死池　元祕河原　曽我兄弟禿倉　行者堂　獅子巖　名所四十九箇所　拜所　十二光佛石像　多田滿仲塔　朝比奈切通　箱根湖水　名産　箱根權現社
底倉湯　蘆之湯　小地獄
湯本湯　宮下湯　堂嶌湯　氣賀湯
早雲寺　佛殿　宗祇墳　温泉記　北条氏墳　塔澤湯　勝龍山　玉緒橋
豊太閤陣所　石橋山
○小田原　外郎店　小田原北條

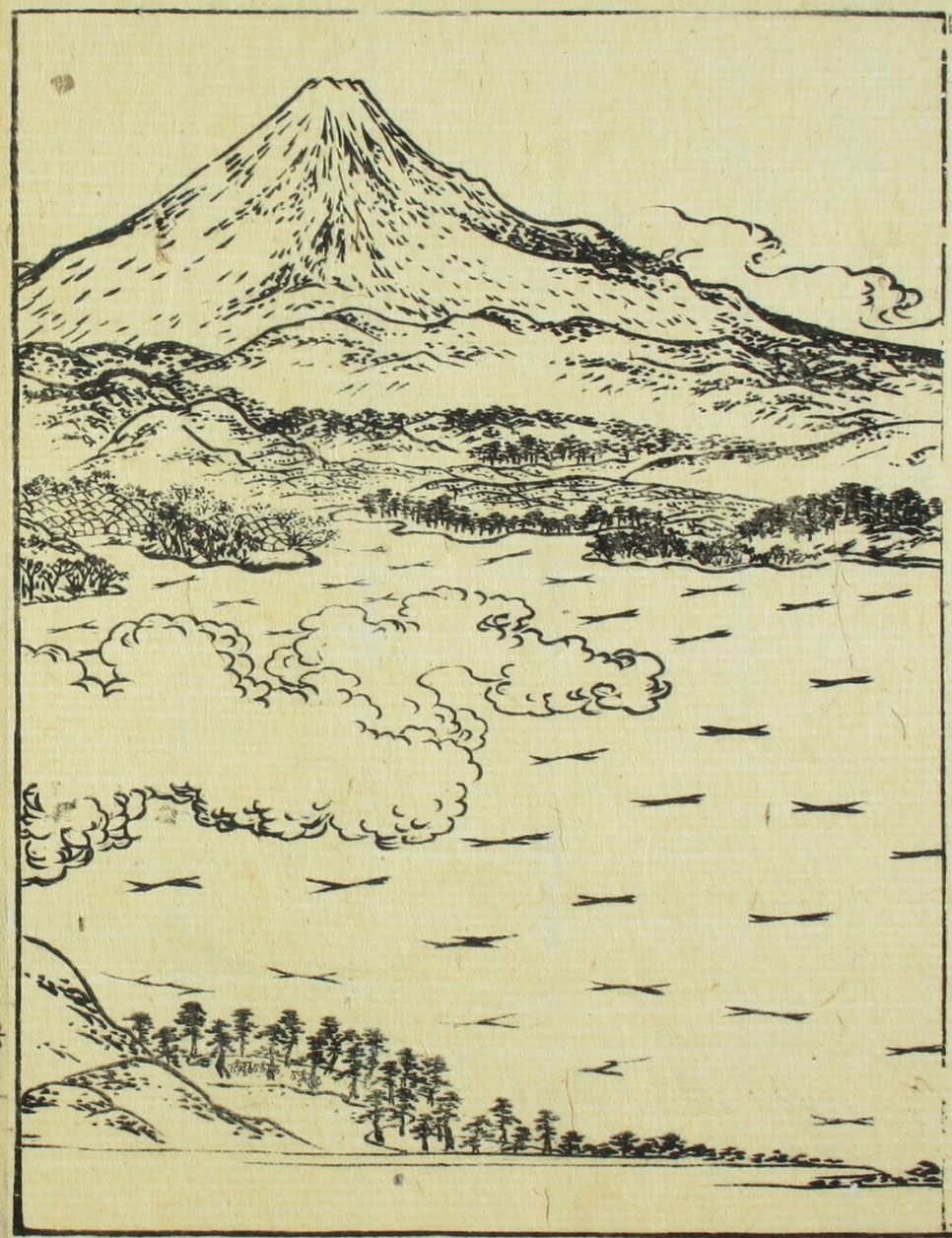
酒匂川　小餘綾礒
藤巻寺　鹿　松
日蔭馬場　小餘綾杜　西行上人像　詠草　什物　鹿御前像
鳴立澤　鳴立碑
三社權現　花水橋
馬入川　○大礒
奥不動　鎮　二王門　真言院石尊社
十間阪　曽我里
○平塚　吾妻山
大山寺　神輿舍　良辨杉　二重塔　龍燈　鐘　龍燈
切通地藏
川勾神社　鹿子石
相模國府　八幡宮　前不動　行者堂　山門　大礒
鳴立澤　早溪　陣泰寺

吉原驛よりうづうひを眺望する
西の方みち遠く視望する
生出ること不可思議
異國ゆきもかくやと
おもふ名ごりおしく
立ち別れ

富士山
扶桑第一山
重此對扇顏
白雪初陽映
峻嶺霄漢間

蕉中常





竹取翁
赫奕姫

源順が竹取翁の家に
實檢圖經ふりく
書わけし安神つるり、
宮人々う竹元の翁う
娘の名頼き肌乃
琴人ゐれて淺宮ふ
入内いてを奉ーと
主客日岩笠ーて
奉うえ、もあれみも
ち歩ひをうぐ不死の
藥が持みく上天ーのひ
あれをチーのかて福と
いつり王元之が竹樓記ふ
琴を數ろふ琴調和暢之
又咸平二年八月十五日ふ記をかれ
ーも日校と賞ーけるを
竹赫奕姫と竹樓記ふ書遺ーれ
ーろひろ憾うーそや

石田大行畫

駿河 吉原

富士山 四海無雙の名山ふしてて駿河甲斐相摸三國ふ蟠るこいくつも駿州富士の郡よわれぐ富士山ふしてて

本朝文粹

富士山記

富士山者。在駿河國一峯如削成。直聳天。其高不可測。歷代寶之。史籍所記。未有高於此山者也。其靈基所起。見在天際。臨瞰海中。觀其靈基所盤。連亘數千里之間。行旅之人。經歷數日。乃過其下。盤去之顧望猶在山下。蓋神仙之所遊萃也。承和中。從山峯落來珠玉。有小珠玉一。其一珠玉也。又貞觀十七年十一月十五日吏民仍舊貫致祭。日加午時。雙舞山巔上。去巔一尺餘。土人共見。古老傳云。山之名富士。取郡名也。山有神名淺間大神。此山高極雲表。不知幾丈。頂上有平地。廣一許里。其頂中央窪下。體如炊甑。甑底有神池。池中常有大泉。出自腹下。遂成大河。其流寒暑水旱。無有盈縮。山東脚下。有小山。俗謂之新山。本朝平地也。延曆廿一年三月。雲霧晦冥。十日而後成山。蓋神造作也。

登者皆點額於腹下。

万葉

○天地之分時從神左備手高貴寸駿河有布士能高嶺不盡山歌 并短歌

山部宿祢赤人

望不盡山歌

天地之分時從神左備手高貴寸駿河有布士能高嶺乎天原振放見者度日之陰毛隱比照月乃光毛不見白雲毛伊去波伐加利時自久曾雪者落家留

新古今 白妙之

同

○田児之浦従打出而見者真白衣不盡能高嶺尓雪

返歌

○奈麻余美乃甲斐乃國打縁流駿河能國與已知其山之有不盡能高嶺者天雲毛伊去波伐加利飛鳥毛翔毛不上燎火乎雪以滅落雪乃零家留

智乃國之三中従出之去乎火用消通都言不得名不知霊母座神香聞石花乃海跡名付而有毛彼山之堤有海曽不盡河跡人之

高橋蟲麻呂

渡毛其山之水乃當烏日本之山跡國乃鎮十方座
神可聞寶十方成者山可聞駿河有不盡能高峯者
雖見不飽香聞

返歌

同 不盡嶺尓零置雪者六月十五日消者其夜布里家利
同 布士能嶺乎高見恐見天雲毛伊去羽计田菜引物緒
同 吾妹子尓相縁乎無駿河有不盡乃高嶺之焼管香将有
同 阿敝良久波多麻能乎思家也古布良久波布自乃多可
補尓布流由伎奈須毛
同 妹之名毛吾名毛立者惜社布仕能高嶺燎乍渡
同 安麻乃波良不自能之婆夜麻已能久禮能等伎由
都利奈波阿波受可毋安良牟不盡能補乃伊夜等
保奈我伎夜麻治乎毛伊毋我理登倍婆氣尓餘婆

受吉奴

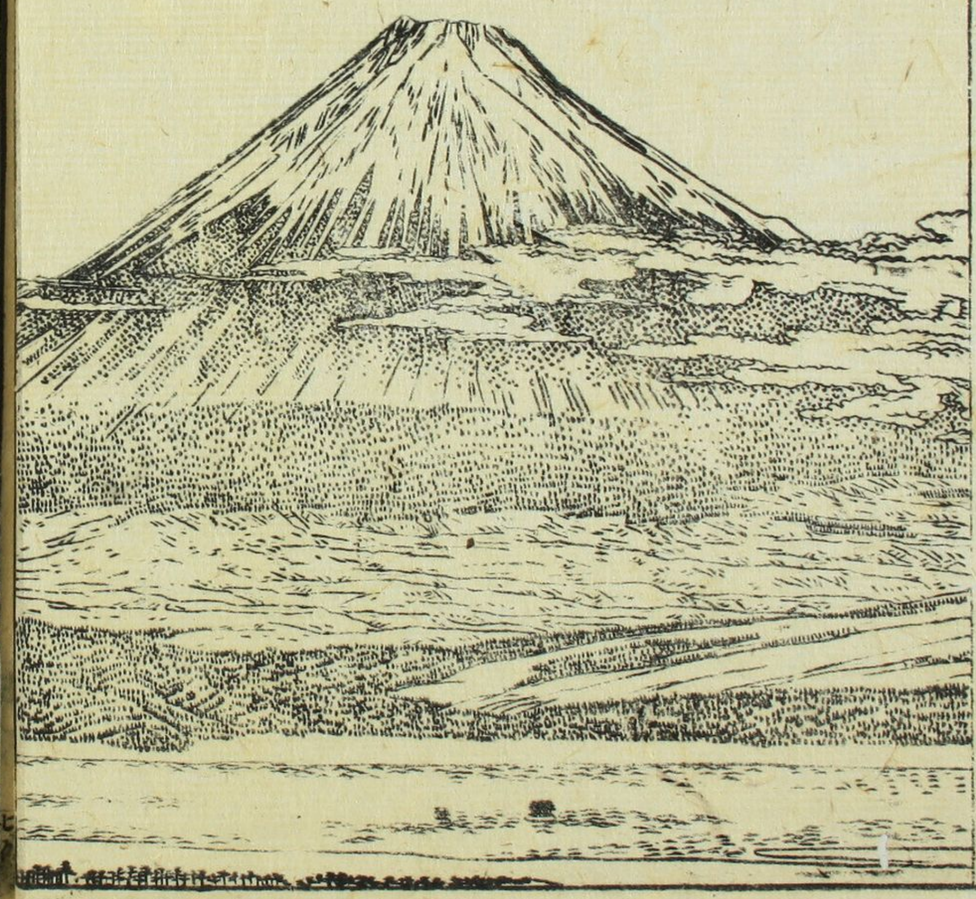
同 可須美為流布時能夜麻備尓和我伎奈波伊
豆知武吉氏加伊毛我奈氣可牟

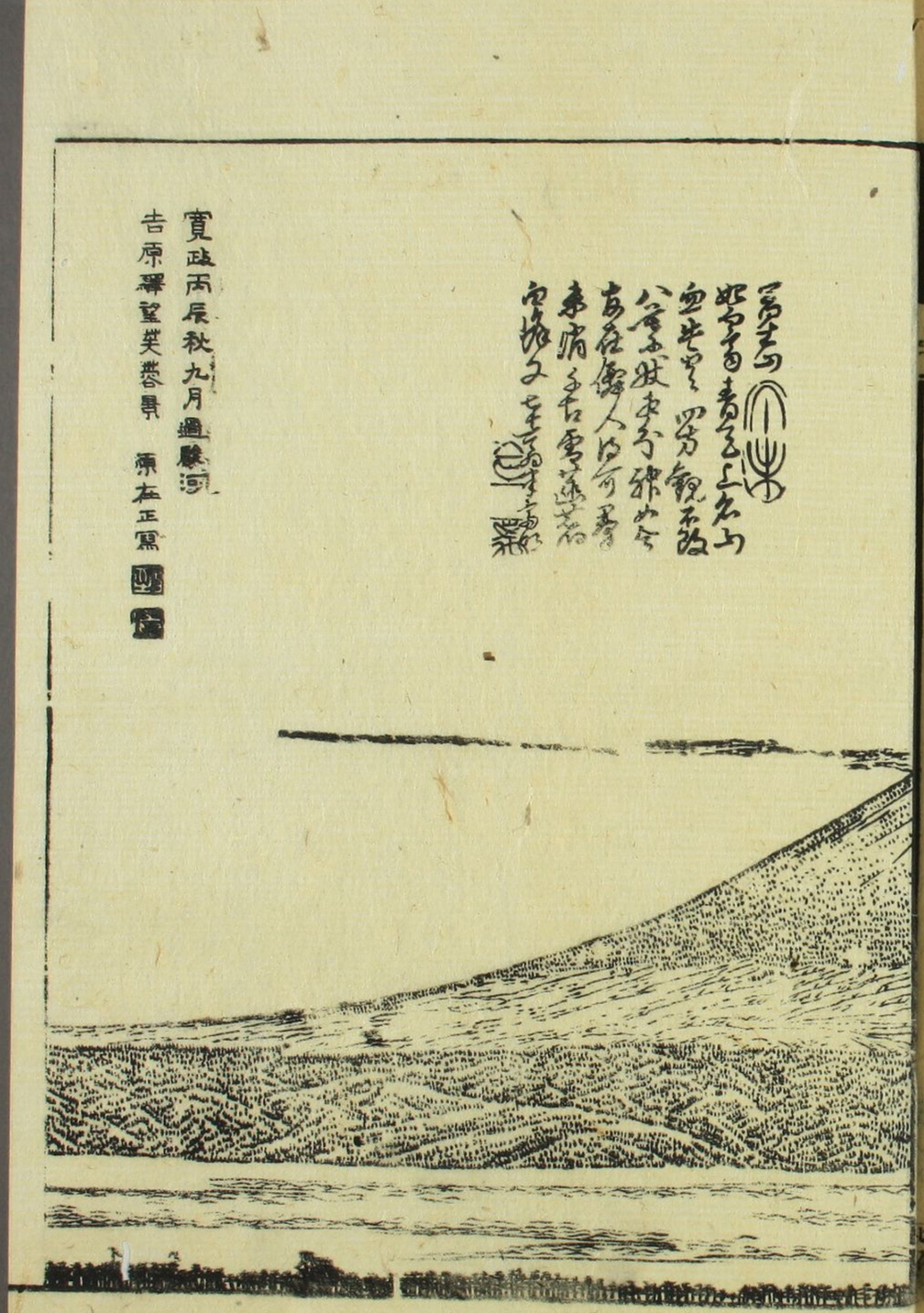
柿遺 子早振神も見ぬ代に山路のさびしき秋の夕暮 人丸
詞花 月こそは山路のさびしき秋の夜の雲ゐに澄める影 大江嘉言
古今 君といふ月待つ間こそ秋なれ我恋行は年の長さを 藤原忠行
同 妹こもる屋戸の板間ゆ雨立ちて濡れにけらしも我が袖は 紀のめのと
同 人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり 淡人
後撰 志賀の浦や遠ざかりゆく波間より氷にまがふ沖の白波
續後撰 婦しの祓する川の瀬の早き世にこそ人も逢ひ見め 正三位
王葉 あふひけてうくも成ぬ東路や三國とうたふ妹のたもと 女
風雅 田子の浦ふもとをはなれ五月雨に絶ゆる間なき雲の白雨 浦
同 婦しの祓を時しも空にゆふ雲のすゑをよくする白雨の雲 惟宗光吉朝臣

題池生富士山圖

寒雲不飛曉色純
稍喜翠峰影參
秋光能向天半色
始知多里一勞君

大典禪師





寛政丙辰秋九月過駿河
吉原驛望芙蓉峯　源在正寫


初春や
乱子ぬひく
路ー
ゆくえも
ゆく末も
春ぞひの
春田友河画


なりけり
富士の
ゆくえも
八ツ中の
朝夕

義楚六帖曰

史

日本國亦名倭國東海中依山島而居其國東北千餘里有山名富士山又名蓬萊山其山三面臨海一面有火煙日中上有諸寶流出其山峻三百一十八淮南王安傳云又使徐福入海求神異之物還為偽辭曰臣見海中大神言曰汝西皇之使何求何觀而不得取即從東南上有使者銅色龍形光上以獻海神曰以若振男女三千人資之五穀種種百工而行得平原廣澤止王不來

帝令名謁男子徐福得平原廣澤止王不來

魚

日本國名倭國東北數千里有山名富士山又名蓬萊山三面皆海一面有火山頂有火煙日中上有諸寶流出其山峻三百一十八淮南王安傳云又使徐福入海求神異之物還為偽辭曰臣見海中大神言曰汝西皇之使何求何觀而不得取即從東南上有使者銅色龍形光上以獻海神曰以若振男女三千人資之五穀種種百工而行得平原廣澤止王不來

竹取物語登天段

かく所願ありてまうでき
思ふ事何ぞ
給ふ
てなん
ける
竹取の翁
已に
絶ぬ
ぬる
ぬ
ぬ
ぬ

月の岩笠ゐりふくとそ
にくべきよ　おほ瑞のみそとき
不死のくすりの理のにが
所のようけなるとて兵者
多く其山成神の山とも名
ものはかなく所いひにくく
此物語を源順の
富士を兵士と富とりくる書
藤山嶽　鳴澤高根　常盤山　麓山　二十山　三重山　新山　見出山
三上山　神路山
伊勢物語
富士のふもとに五月のにこりに雪
新古今業平朝臣
時しもあれ山もと富士のもえ
其山はなたゝ所もえの
てなりいと高きものにて
塩尻に伊勢物語七箇の秘説の其二
の奇あるを川。もなとも。都鳥。の事。

丙辰紀行

一山　高ノ出ツ衆峯ノ巓炎禋ノ雲一氷雲上ノ烟リ　羅山
大古若シ同ニ六仁者ノ樂蓬葉何ソ必ス覓ン神仙ヲ　徂徠
望嶽
何物芙蓉落日寒關中霽迥絲雲端
青天杜嶂出白雲千秋突兀看
誰カ指仙衣懸縹緲自疑玉女剖琅玕
于今石跡山陰ノ地換ニ取驪駒ノ問ニ大丹一ヲ

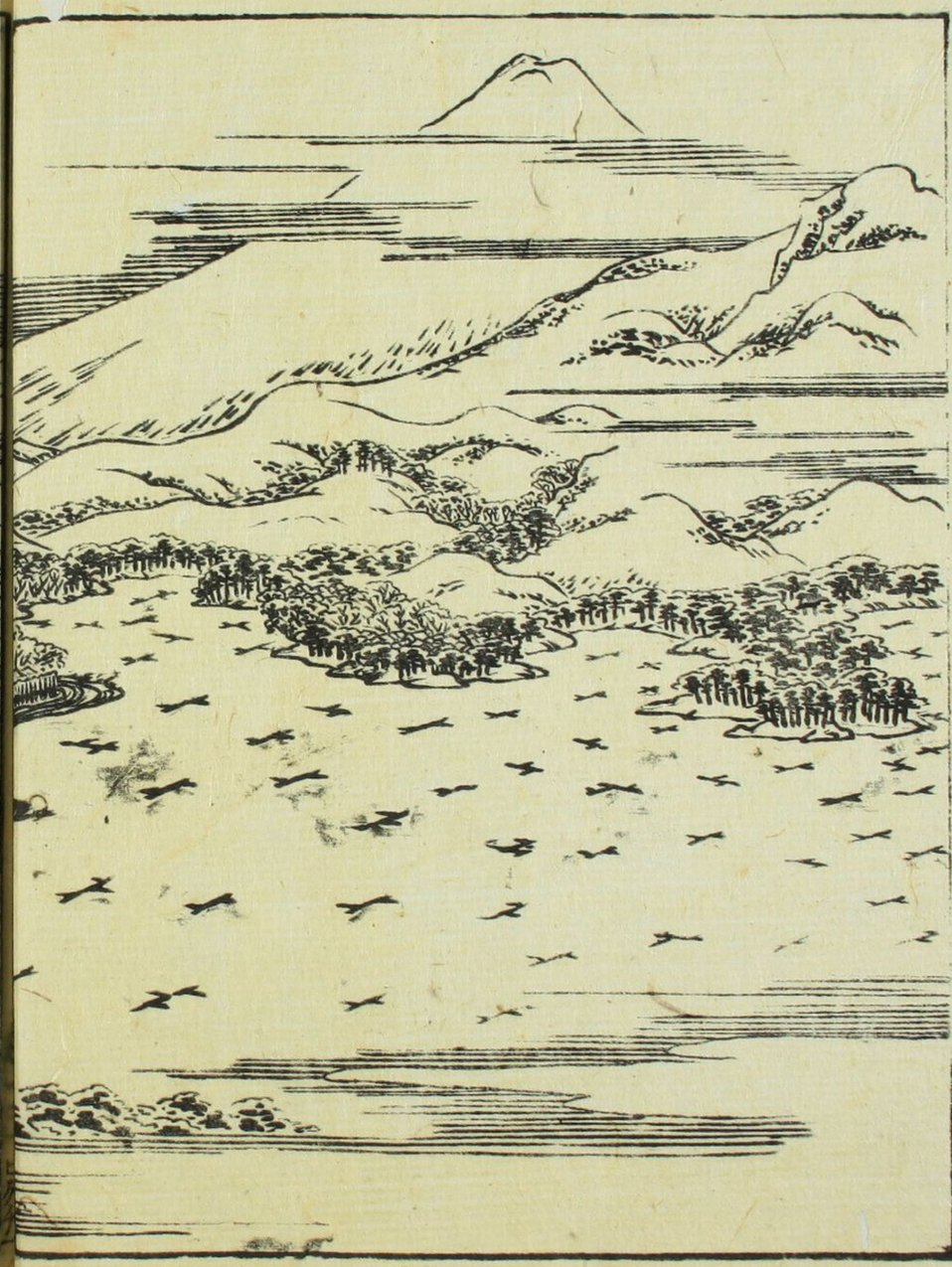
落日秋寒海上峰危樓西顧眺芙蓉
浮雲不隔瑤臺色雪下珠簾十二重　萬菴

芙蓉峯
大海天北盡連天芙蓉秀出芙蓉白雪　金華
光
更御海上日
駿州道中逢故人
四馬悲征役相逢風雪裏
在苑叙綿袍空蓮嶽雲猶闕萍洲途
已隔春鴻ノ問ニ處ヲ従此去ハ何處問ニ春鴻ノ

賦富峯贈熊箕山
芙蓉獨立卧清虛始信大東天帝居
堪競俊才高復潔氣調来追奈君如

朝鮮國文學
秋月


新古今
名をかへ
昨しの
いつくとも
そなく袖も
ぬるゝ
かなしさ
右大将頼朝
ふめその
ふりゆくも
おりそへ
そふる
松
淡海光根
文营中書史



其山の記

其山のさま海辺を世よみえねさま方形りを国ふせこのもん
ふもうに似ぬもろ屋うに形るみ雪のきめる世も形くほりくれ雪を形ふ
ふねふもろれわこ処ふくふんやうにみえく山のいてきのをあったや
たるようくそうをたちのほるゆくれ火のふりもみ雪をふ

嫁しのくれ

嫁しのくちのすき情も処形ふくーた見くー物ふいたのやくーよう

新後拾遺

嫁しの称を雪ふくめるれ山ふ形見　同

新千載古

浪つれて嫁しのみ雪ふ消日もめる形宝の山の下葉　順徳院

新勅撰

嫁しの称をこそても空ふれくう雪ふ上ふ雪ふ白雪　守覚法親王

新拾遺

時くめ山郭公五月まて雪ふ嫁しの称ふ形ふむん　牧部行民

新後拾遺

嫁しの称を雪ふけふ見れる白雪の処もおほくく可ふーた　春宮長秀

家集

人ふれ雪品ひも形かの嫁しの称をひふことのくやふもめん　伊勢

月清集

嫁しのふきめれいやうふる雪の一日も夏ふなる空をめれ　後京極摂政

家集

焼人もつし山ありふ雪のうちより煙ふ出ふて

万代集

舟とめる田みの二はのタ日ふきえて久う

家集

草ふみまる見ふまる牧やう火とみめるふかの煙こそ

新六帖

するが形ふ雪ふくふ見ねのふもの色ふ形ふし

光行紀行

田ふみの浦ふうちおく富士の高根と見れいとれにくめ雪ふもる

形くていまる白妙ふはの衣ふして天ふまでうすぐこもの子うも

ふ形ふう見越員観十七年のその比白衣の美女あり二人山の麓

ふ形ふ人森ふ都良香ふ富士の記み書ふふいう形ゆくふ覚来迎

富士の根の風ふ雪ふうふ白雲ふ形わす川神ふめ袖ふふて見る　光行

曙記

このふの名残なく空ふれて富士の麓ふて雲ふ形ふ春のふもふきく

雨尽くる曙さまざまの物をかし御旅宿うち
仰ぎ新せられぐさまに今ぞやさらぬ御定有けさ
富士の御當座あそばし御詠 二條
左相府
雪ぞ降りつもるとはうき人をひかぬ心の白雪
おもくあまたたびすゝの忠中よ謀(はかりごと)も幽玄(ゆうげん)抜群(ばつぐん)の尊詠(そんえい)形(かたち)ども君
あけぼの春を見そむる姫の富士ねぐらの雲
御うた毎見士一峯憩ニ口 弗ノ九 天霞霽仰ク弥高
莊周曾曰ク泰山北ニ一ケ比倫秋ノ毫 光廣云
八重かすみたちもかくさて姫の山雲ぬきいでそめし
東紀行
あかなくに日もくれぬとて旅人の立とまりつゝ
帝掬嵩雪置之扶桑東
突兀五千仞芙蓉秀碧空
うつし見ん人とそいふらん富士の姿も世々の宮ぬ
姫の神の雪吹き乱る風よ人こゝろ一むらくもる浮嶋ヶ原
詠富士山
嶽色遙淳遠客航擬従高處振衣嘗
環形屹立雄天地積氣常寒擁雪霜
瑞靄清籠池上竹灝光低襲海中泉
詩篇恰有愚公力移得羣顛入彩曩
右 朝鮮人李礎東郭詩
贈鳥云
えた日の見る物ゆゑもなき姫こそ
富士の山波をもとゞめられすとこう歌
富士ゆきふく三月七日八日この船
日ゆかゝる時やまた我さうき五月雨二
禾二の繪贊
三帆舟を造風ゆるかみ
富士の笑ひ日ゆりく高く桃乃花 宗鑑
百富士や其もえ日ゆりく 湖春
あけき日々空ふれぬ姫こその名 信徳
四萬八千丈富士ゆきみ 其角
加賀ゟ代 雪國
住堂
雞兎

武衛頼朝卿ハ烈國の靖度ヲ
征ン〳〵三國ふみひらき富士山ふもと
牧狩〳〵の事ども
實ふ征夷將軍の
いさをしあらハし



清峰画



祖先の
源頼光公ハ
大江山の鬼神を
退治ゆゑ
名ハとゞろく
犬の姿ぞ
登と
雨月の論ふあらバ
君よハ見てこそ
通つゞきをみて
もらひまと作る



真二

ふたつの牧狩

曽我兄弟夜討

代詠ぜられ本朝にも此縁にて三鴉を
那智の水無月の禅定を松明にて照し
真砂に消入の裾小紫くれなゐの其夜又峯へ登る其音洗ふのみ
にて峯に小鳥沢の名ありまた里人の富士の御神の形ばかり
みやこに我と竹取物語にも作りうの者有て竹ふうの
名ありや此土記にも載ず今昔物語にも
見へ詞林採葉にも天智天皇此山嶺の窟
に籠れる事ども記し又桓武天皇かくや姫に逢給ひし事ども
それ〴〵に不死の薬に献ぜしと新富士の
名ありうの立のほり煙まがふ起るとも書り天智帝を東師御廟殿
より臭天へ立のぼるとく御覧の所ふ凌と薬て凌村の名今ふあり日本紀

小ふ津宮にて崩ずとあり武人の云富士巡視の人時雲靡
森児鴉のかうそ崩ずとも今も御陵の地ふあると其国の人の話り
小建ぶといふ其訓顕然れど皆ふれ秘蔵の事ふれ桓武帝後に東師深草柏原にうつる年
物語ふまぎれふ荘ふ載ふ竹取翁ふ富士の煙ふ
かくや著れふ宮ひふ古雅の名ふて歌道の標ふある赤人
白砂小誉ふ取後成卿ふ武将ふ武将ふ富士ふ紀名ふ残ふ法師ふ五文字ふ武貴
ふ頼朝卿ふ牧狩ふ武将ふ富士ふ曽我兄弟ふ俱ふ天ふ戴ぎ
ふて年意ふ達ふ掌ふ座房ふ仙境ふ入仁田忠常ふ人穴ふ名高く役
小角ふ木履ふて步ふ上ふ天ふ駿馬ふ駿馬空海圓珠ふ登山ふて
石佛ふ滴ふ徐福ふ秦童ふ絶頂ふ鏡半腹ふ崔
冨士松の紅葉ふ二甘草ふ芙蓉姫ふ海苔冨士の八湖ふ倒ふ乳
と浸ふ甲州の府ふ三ふの嶺ふ足ふ眼の霞ふ姫ふいふ彩ふ

むし社東海道の富士愛鷹やまの山つゞら延通ふ其中ふ横走関と
いふあり愛鷹まで更根走されば富士乃三関といふの道成旅人行
く通ふ重服觸穢もいとゞ愛鷹明神やく厭せのひ南海の中に甲斐
いつゝる鴻ヶ嶺打ひせう分ゆて今の海道そおおそう其おゝし
鴻ヶ浮鴻原といひ傳へいる抔三國無雙の名山と賞じ義楚六
帖ゐび宗學士ゞ日東曲も慶く蓬萊山く歸る所紀の熊野尾の
熱田社ふかる事そんゞ中ふも最上ふて真ふ我邦の仙境梅福
九華眞妃もを乃を憾多き事ふ下

神社考

孝安天皇九十二年六月富士山涌出ス初ハ雲霞飛来ス如ク轂ノ聚ル魚ニ嚥ム嶋ヲ而後頂上ニ五盤石出ル其落下ル趾作ス溪ヲ谿ヲ取ル郡ノ名ニ而曰フ富士山ト形似レ合ヒ蓮華ニ絶頂八葉層々到ル第八層ニ中央有ニ大窪窪底湛ニ池水ニ色如ク藍ノ滌レ物ヲ飲レ之ヲ味甘酸ヲ治ス諸疾ヲ池ノ傍ノ小穴形似ニ初月ニ穴中或燃出シ黒色ニ兼烟ヲ雨ス土沙ヲ或白雲金光映ニ徹ル現ニ鬼神ノ形ニ赤黒ニ和三年季春垂珠ノ篇ニ雨ス玉ヲ四方ニ貞観五年ノ秋白衣ノ神女出現ス雙立テ肆遊時ニ火ノ炎揚ヲ有ニ圓光ヲ即祭之ヲ号ス火ノ御子ト古老傳ヲ云昔大綱ノ里有ニ老翁嬢ニ共ニ居ル翁愛ル鷹ヲ嬢飼フ犬ヲ後住ニ乗馬ノ里ニ作レ箕ヲ為レ業ト竹節ノ中ニ得ニ一女ヲ其長一寸餘奇之ヲ養レ綿ニ包ニ容ル負端ニ巌ノ言ヲ語和ス雅ニ于時ニ天子詔ス諸國ニ採ニ美女ヲ令ス獻レ之ヲ来ル女使ノ者至ル駿河ノ國富士ノ郡乗馬ノ里ニ宿ス老翁宅ニ終夜有ル光使者怪テ問フ曰何ノ故ゾ道夜燃ス火ノ光ヲ翁曰我ニ女之ヲ光ヲ彩ヲ也使者窺フ之ヲ其女甚美也誠ニ是レ天子ノ求ル女ヲ汝ヲ宜ク奏ス女ヲ不レ従ハ事ヲ于時ニ女語テ父ニ曰ク親ノ恩誠ニ重ク深シ雖レ然我ハ養ヒ育ル之ヲ愛ス之ヲ久シ不可レ住ス今ハ我ハ去ル母ニ云フ思慕ニ登レ山ニ入レ嶺ニ嵓ニ巳ニ而如何ゾ女云フ常ニ来テ相見ル乃チ上ル富士山ニ与ニ翁ト登レ山ニ休ス於ニ第五ノ層ニ脱ス玉冠ヲ留ル此ニ霧ヲ漸ク進ム陟ル絶頂ニ臨ム巌嵓ニ女出迎ヒ微笑ス曰ク頷ス天子ノ詔ヲ住ス此ニ因テ共ニ入ル嵓中ニ玉冠ヲ所ニ在ル積ル石ヲ以テ為ス陵ヲ云フ延暦二十四年ノ冬十月大神ニ一斉ノ京ニ所謂翁ノ者愛鷹明神也云フ鷹ハ嬢ノ者飼犬明神也嬢ハ者社ニ祭之ヲ改メ乗馬ノ里ヲ号ス一平城天皇大同元年立ツ二神共ニ住ス新富士山ノ宮ニ

富士鳴澤

万葉

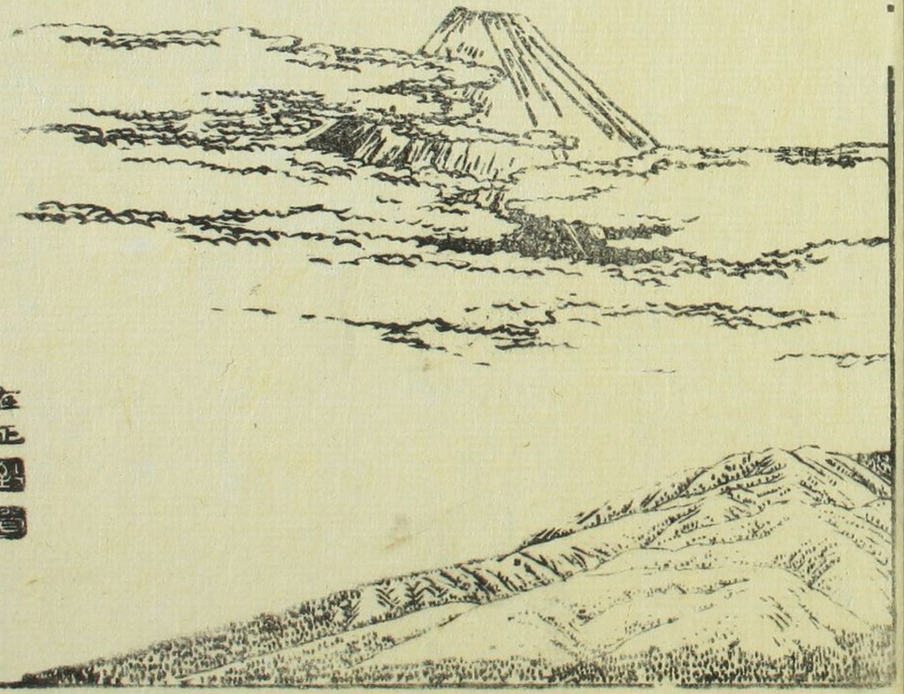
佐奴良久波　麻乃緒婆可里　古布良久波
布自能多可　奈流佐奴波　能其登

續古
今
新拾遺
〃
〃
支木
〃
無名抄
五條三位入道
万葉
後居而
珠藻
拾遺
古今
新古
續拾遺
風雅
新拾
續千載
草庵
家集
〃
〃
〃

田子浦

直水茶煙天際合海門春色
生愁嶽空巢嶽名點綴
房南舟客語戸吉煙細漠々
鹵中浮人家依疎竹漁笛
過々西洲暮碧壁忽斗絶々
峴蒼苔徑僧坊花間見
林鳥隔溪遊浦春波夜
汎覧ふ暇酬しの雅好
遠客可お西田江
石為憶謝海池と瑞公云
西延首慕良傷清渡往
盈掬憑寄恨東流

嗚呼多篇士
釋迦の生れ
変じ
蘇峯





富士沼　吉原の北にあり富士八湖の其一と云ふ延喜式行幸路の駅名の歟今は小沼となり水草多く生ず

徳本村今は小沼東西三里許もあるべし昔は此湖の内なる島の形も見ゆと聞えしが今は然らず富士川のかよひ船も此沼を通ふ

蒲原　駅家あり

春草かすみうすく岸の小松ところ〴〵に見えわたりたる

前次百首　源仲遠

水うき紀の小舟の沼のしら波にかすみをわけて行かよふ

先行紀行

浮島ヶ原をいくほどもなくて富士の裾野ひろく打つゞきたり

左富士　右原驛より五町許東の方中吉原より入町半の間松並木にて富士よく見ゆ

行くほどもなく道の北南に海の面遠く見えわたりたる

元吉原　今の吉原駅初めてなり又吉原宿あり又毘沙門堂あり

吉原宿あり砂山北藏香久山妙法寺あり日蓮宗の寺あり又毘沙門堂あり

肩上ヶ平と徳王乃尊像とを又香久山稲荷明神の祠あり

又香久山稲荷明神の祠あり

鏡石　旅宿あり

鏡石旅宿あり

手児呼坂　元吉原四ツ屋にあり八雲御抄

手児呼坂　俱ヶ駿河國ヶ入

万葉　都乃麻道乃手児欲婢佐可古要氏伊奈波

同　婆古非奉奈能智波安比奴登母

安倍豆左賀古欲比我要我祢氏

麻呂尓

夜杼尓

万葉　安倍乃手児欲比我要

同　安倍乃手児欲比我要

夜杼尓

麻呂尓

万葉　都乃麻道乃手児欲婢佐可古要氏伊奈波

同　婆古非奉奈能智波安比奴登母

安倍豆左賀古欲比我要我祢氏

麻呂尓

夜杼尓

持里波奈之乎

万葉　安倍乃手児欲比我要

同　安倍乃手児欲比我要

夜杼尓

麻呂尓

持里波奈之乎

原駿のわたり一ぱくばかり
まうく漁家ありて初松
もるばかり磯ぬるくあゆ
このふる都ちかくなりぬ
故郷二十里長江十二瓜
と侘るもしばやうの
あるべし

拾遺
いそ海の
波ぬるゝ
浮脂の
松ぬるゝを
見て
損ずん

沖漲ち風吹き添ふる夕潮の波

法眼顕昭

家集 よの中のわれうん鴻乃ひとつ波ふむ音に浪ぞ立ちそふ

泰盛推定

行く雁是皆浮鳥の生ける身を尚ほ未練蔵の影の去来無常

澤蔵和尚

雖蔵身尚未練蔵影去来無常

貞應海道記 うれしと思ふ原にもれぬる名をうらみてぞ行く野径の露

片々と絶えてうき身の新樹径

白隠禅師蹟 源の驛鶴林山松蔭寺といふ禅宗派家伝僧を當駅中興す

寺そ得道一来師ありて諸山あまねく四衢の道ふまよひ迷ひの雲晴れ

五年十二月十一日寂八年八十四 縁ありて存日の時徳迹の雲消えて菩提の月明

かなり 滅後の名僧多し世に行はるもの二代遠和尚あるも亦禅師と号し白隠和尚行状を著はす

白隠禅師語録中頌古

清浄行者不入間蟻塚青蛉翼新蒸並休楊柳枝

山婦携籃多菜色村童揃箒折疎籬

白隠和尚

のうと富士海苔

家集 夏も猶きけのみ乃月さえ冬まほりぬ一き渕の芦川

法眼源全

駿河原 家集 高根より清ぬ雪水も流きて月ふ敷さる蜂ノ乃芦川

源氏真

委曲浮鴎原小田富士沼南北大洋漫々たり其中の曠原於れへ

知名あり原吉原蒲原なれ共三原ことふ沼津ゟて三里半

新勅撰 あの辺奥浪越川志の久ふ一むらむ浦ゟ原

俊秀撰者

風雅 吹ちらすみの高根乃朝風ふ袖さ寒れそふ浮鴎の原

法道長智

新拾遺 白妙のみ乃ちさ寒て砂浜志ら波ふ高ふ

安嘉門院四條

ま本ふひとの道ふくとにも聞ぬ名ふ立ちそふ浦乃原

同

みの根乃裾野ふ鳴ふ麻の聲もつゝく浮浪原

順徳院

建保百首 ふきこすらぬみたきけの色ふ有ふの月の浮鳥乃原

正三位知家

ふよらむ乃聲ふさえ渡ふ月の浮浪乃原

従二位行能

雲の波ふ浪のそて越ふ原

深山佛法遠　白隱和尚

深林漏月寒猶在　舊巢受風宿鶴鳴
烟露輕浮補岸闕　藤蔓倒掛引薪行

偈頌

示徒

活埋自性一葛藤　窟刺殺已霊荊棘林
青菜或問先後斷　黃苗白蘿蔔紅纏葛猶泣止啼金
夢裏明々有趣了　時魚一點精魂
今問底是斷乎不斷滅乎予云
善星纔起斷常見　生入泥犁永劫昏

同　司

師諱恵鶴號白隱僻駿州原驛杜蔭寺
以貞享二年甲寅生。幼而韻達。年甫十五
一歳辭父母出家。因松蔭寺單嶺傳公。雖涉十九
歳參問于諸州老禪三十一歳歸郷。嗣法于松蔭寺。元丈五年庚申春。許嘱
鱗堂録。妙機英發。名聞于海内。參學之徒數百
後應四方之請講評経録者凡五十會。帝子諸
侯延師聽法。無虚歳。明和元年甲申春就本院
大應録。參徒以千數。爲五年戊子冬。罹疾
提端然而寂。實十二月十一日也。享年八十四
遺骸於寺之隅一扁塔。曰荊叢嗣其法者。龍澤東
嶺延慈。松蔭遂翁元盧也。所著槐安國語聞提
記聞。息耕録普説。荊叢毒藥。及國字法語。遠羅
天釜等若干卷。行于世
明和六年六月八日
敕謚神機獨妙禪師

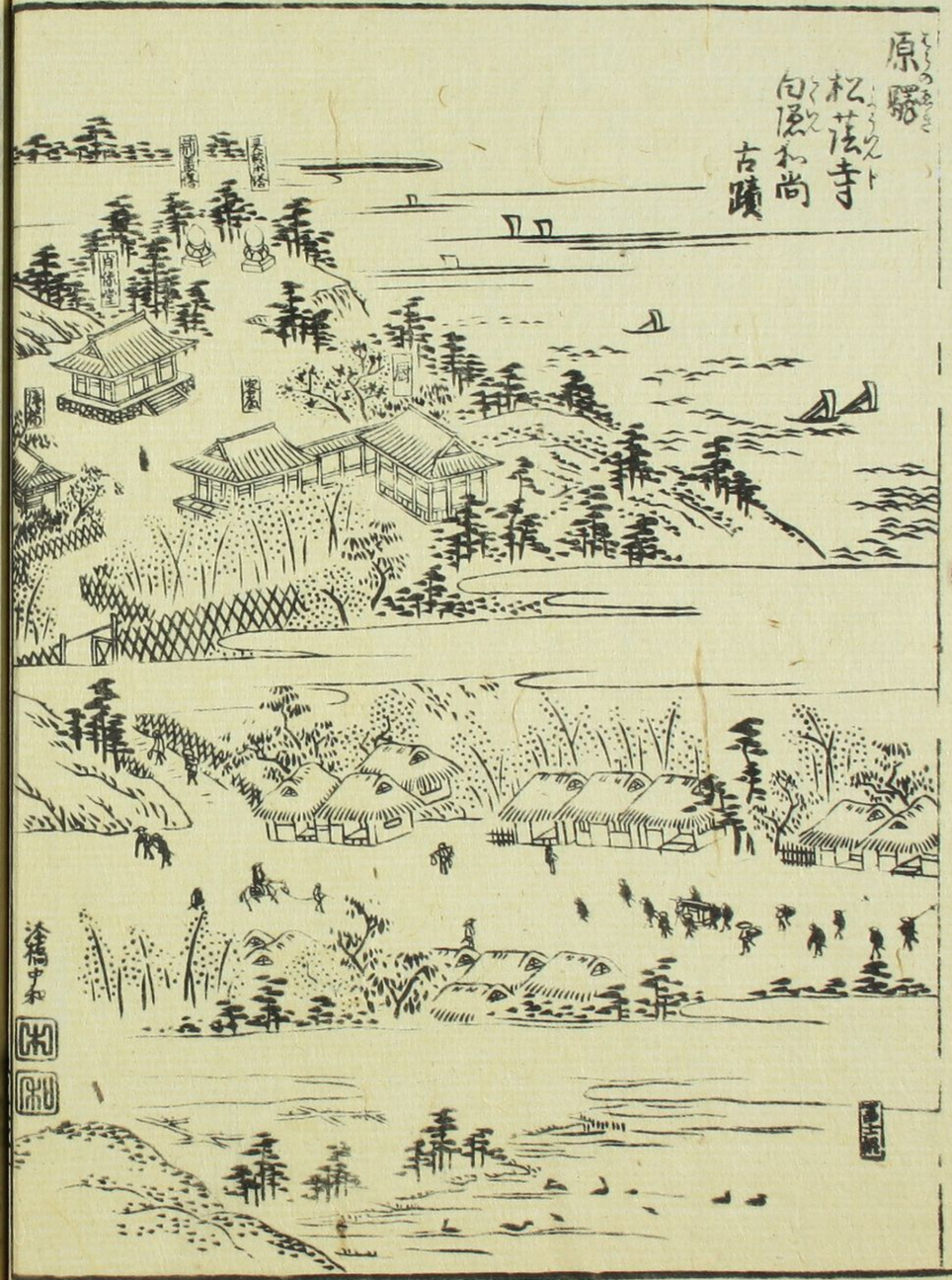
師歯迫山

（万葉　荒海熊之土人住云山名者不告　実本）

わくらばの人もとひこぬ深山辺の小笹が原の風のそよぐも

興國寺古城

（亀ヶ小田原合戦の後中村式部少輔忠一慶長六年天正六月封駿府
國原田村の郷人諸人ともに拝領ス。同十二年三月九日大御所家康公
阿野禅師古蹟　此地の麓井出里という人所ゝ云禅師の右大将頼朝卿の
東鑑云　建仁三年六月　於下野國誅阿野法橋全成云云
ム井出村大泉寺という小禅師の遺物ハ什寶ニ
阿野細江　阿野ハ井出村ニあり小流ニて細江ニ入海ニ注ぐ　藻屑草ハ入江ニ生ずる古歌聞之原



井出館古蹟

井出里をりふし右大将頼朝公富士の狩倉(かりくら)ありしとき曽我兄弟父の敵工藤祐経を討(うち)しと聞(きこ)え所こそ其時


前九後三役畫
義光素首
巧吹笙
尋踪為之逐
源公子之
妙曲再聞
玉鳳鳴
右安藤鳴山
記新羅故事
熊尚之


英林

愛鷹山

又蘆高或ハ足高或ハ足柄ともも書ク古来より名所集相模國ニ入
発足ともなして富士ヲ富駿ノ国駅より近ければとりて歌ニよめり小田方
三里ふもとより読ニ延暦廿一年三月雲気山頂ノ坂ヨリ
出現せり故ニ新山と号ク山頂の坂ヨリ湧出ル事隣峰ニ倍ス古今ニ富士ノ
と富士ニこのあらそひの東海より富士の根ヲ隔ル事ハ
駿ニ愛鷹山ニ愛鷹ノ名ハ
駿ニも此ニ通ハシテ
甲州の北ニ還ルとぞ

旅衣

旅衣ゆふ日ニ足柄山ヲ舟本切ヨリ松ヲ舟本ニ
岩ヲまとほるやうニ乃高ク入ル
おのかつの山ハの月ヲ峯越てあくれハ
ひのみの関ハ相模ノ上ヲ
国ニ入口ノ関

足柄関

新勅撰
ひのみの関ハ越ぬ志の矢ヲ一しほかれむ陰ハ恋ひつゝ

源氏

あしがらや関の戸さゝぬ頃ハ行月ヲも越んあら礼山

同

秋まてハ神の高ねヲ見つゝ君ハ今ハ名残分てとこゆる足柄の関

新勅撰

しくれつる雲ハ外山ヲ捨そめて嵐ハ関ヲ足柄ハ関ヲ今ヲ

藤原為家

従三位経盛

為家

飛鳥井雅有

藤原孝範

卜部兼直

新後拾遺

足柄神祠

神主沖津氏

神社考云足柄ノ明神昔赴ク唐ニ其妻神獨留守ニ三歳明神歸
朝妻神色白ク肥美明神曰思慕之情待歸之心必可痩ヲ
裏ヲ今何ゾ肥而麗哉不思我ヲ也遂ニ去ル妻神ヲ

富士人穴

北條記云

建仁三年六月三日将軍頼家卿駿河國富士の狩倉ニ入ル其
藤ふぢの穴あり世の人ハ此穴ヲ富士の人穴とぞ名付ケ人穴の奥ハ極
めさせしれずあるとぞ仁田四郎忠常此召ク重寶の御劔ヲ給ハリ海ヲ
穴の中ニ今ク奥ニ極め参ラセよとの上意ニ忠常畏ク御劔ヲ賜リ御ヲ
手ニ取ヲ従ヘ穴の内ニ入ル次の日巳の刻ニ忠常人穴ヨリ
来ル注進ス一日一夜ニ廻ル将軍御前ニ召テ聞召ニ忠常申
ケルハ中ノ程ニ川洞甚狭クシテ踵ヲ没ぐ水ヲ通リ過テ
公のゆく進ム程ニ又甚暗キ事ヲ毎ニ松明ヲ

焼一互ニ聲ヲ合セテ泥ノ径ヲ路ノ間ヲ水流テ足ヲ没ス漫々蝙蝠幾ヲ
リ人浪ノ如ク火ノ光ヲ驚キ亡ク飛翔リ空ニ白キ蝙蝠モ亦少カラズ
行ク事漸ク力ヲ極テ切流シ亡ク進ム少ク腥白ノ異香衝テ
嘔噦セシムルヲモ人ヽ甚ノ芳シキ薫来リ亡ク涼ノ事モ
漸々ニ廣クシテ上ノ方ニ何ヤラン色透通リ亡ク青キ氷柱ノ如クナル
物ヲシテ見テヨリ前従ノ中ニ小物ヲ籠ル申スモ
石藥ノ仙人是ヲ取テ不老長生ノ藥ヲ煉ト傳聞シヲ語ル
乃下俄ニ雷ノ如ク亡ク音シテ千人ハカリ一同ニ興ヲ作ス風ヲ聞ニ是ニ
定テ修羅窟ノ音ナルベシ亡ク猶ヲ耳ヲ
暗ク松明ヲ焼一續ケテ一廣キ所ニ出ヌ四方ハ黒暗幽々トシテ
遠近ニ時々人ノ泣聲聞ユ細キ事ヲ計リ遂途ノ旅路ヲ
問ヒタガルカ如シ

七足ヲ以テ張リ落ル水音ヲ其深サ測リ難シ亡ク足ヲ
浸ス事ヲ得ズ其水ノ早キ事矢ノ如ク冷ヲ極ル事
紅蓮大紅蓮ノ地獄ノ如シ是ヲ十川向ノ其遠サ七八十間モ有ラン其中ニ
松明ノ如ク赤ク物向ノ小見ユ亡ク光ヲ放ツ其光ノ中ヲ見レバ
夢異ノ御姿ニテ左ノ如ク立テ玉ヘリ即従四人ヲ其傍ニ侍ラシム
愚案ノ御靈ニ礼拝スル小御聲ヲ小教ヲ垂ル事ヲ
給ヘリ御歓ノ其川ヲ渡リ給ヘバ御姿ヲ隠シ
坐ス亡ト申ス頼家御聞ヲカシ其奥ヲ定ク天地ノ外ノ世界ニ
重テ渡一舟ニ僅ニ七人ニ乗ラシム多クヒラク見ユル事ヲ
ニ老ノ人ヲカラレシ亡聞テ亡完ヒ渡ル事ヲ
むしろ逆ニ其中ニ見ル事能ハズ亡ト申ス
彼ノ人ハ将軍家ノ御身ヲ守ラントテ御慎ノ小ヲ
ヒ給ヲ松語ル

文覺上房にうしめ院宣を
申ていく頼朝つふ義兵を
揚させ給ふ事おそれ
入候へ共宣旨を
六代御前迄滅すべき
源氏なきふ不レ
令と思くも山上人へ源家
の家名つがせ
給へく懇望
是しかしながら
阿羅漢向の
併道ゝわりふべき

八重山　足柄のかとうのやまの歌ならびしもさる所の地名也

万葉　上總國朝集使大掾大縣眞人今城向京之時餞之歌

安之我良乃夜波伎也麻故要民伊麻之乎可伎美等弥都々志努波牟

新千　そたに今都も遠し八重山関の八重山敷島のそれ

名寄　陸奥國雪やへ山をうちこえてひろき野に出ぬ

丸子神社　東間門村にあり延喜式内社にて神國考に擧ぐ所の生土神なり例祭二月十六日六月十七日

千本松原　鴨津の駅の西南五反田村の海濱の松原なり天正の比武田勝頼合戦の為に切伐りて今は松原なし伐株ばかり殘れり今の松林は後世植継ぐ所なり又寛上人擧朝の小祠もそこにあり

清水國量

千本松原とうたひおほせ海のあなたも遠からじ松ならかふ生ひつゞきてみどり

中納言親王

好けきもの駿河の路一神ふび給ぐもひちびく木の葉乃うきたびにだにも

又巻の千株の松乃下の雫掌に一葉の舟浮べ中乃萬里の身と

絶ところなれも是もそれ眺望いとゞくも勝れり

又千本ほそのの松乃をみどりふかき海のうへ

光行紀行

千本松原とうたひおほせ海のあなたも遠からじ松ならかふ生ひつゞきてみどり

好けきもの駿河の路一神ふび給ぐもひちびく木の葉乃うきたびにだにも

又巻の千株の松乃下の雫掌に一葉の舟浮べ中乃萬里の身と

絶ところなれも是もそれ眺望いとゞくも勝れり

又千本ほそのの松乃をみどりふかき海のうへ

平家物語六巻

会稽小源四郎時政鎌倉殿の御代官として都小宅り平家のこ孫を亡さんとて小松三位中將維盛卿のこ君六代御前の十二歳小成給へるを捜おい六波羅おく眺小旅せんとする所小高雄文覚坊生白今命延給ひて鎌倉小下給ふ事早昔も今も何の沙汰も聞えれば小条時政六代御前の事

建久四年十二月十七日晴雲井と餘雪小風打ちこゝ大津の浦雲津乃原も物ぐるおしく野くも山も皆々おもひ

奥打ちこゝ大津の浦雲津乃原も物ぐるおしく野くも山も皆々おもひ

下る又駿河國土も成一ろの雲の御命々々限こそ又今日み幸松原

とうち詠小御輿式居させ給ひて布波小立こまる小家乃元

馬より飛で降り若君の御傍近く参つく申されるこれ道にて文覚見

の聖こそ小候とあれまいて海辺山のあなたまでい篠竹乃

乃御名申も計無公八近江國おく美濃せなる板倉庄りん一業所感

の御身那しい誰申共も叶り七のひ作りどとやされ七ばこそ

迎事おも及ひなれば齋藤六ばかりて宣ひけるお完賢故る都雪う

我道こそ斬れたりとも思うべき其故は後ろ
に有様に聞かんと欲悲しき後世の為にも成んぞこん錣倉まで送
て上る途中小宮宿にて二人の者共涙ながらに良有て斎藤五
涙ながら押て申々ながら君の神も佛も成せ給ひ後命まで再び
助り上る為〳〵共ゆゝしい〳〵そして又涙ながら押て助ふ
一時御髪の肩ふ殺うと欲ふ共君命の角と見〳〵
の人寄譲の武士共見奉せてお那最惜未御公の世ばそこそ
唱へさせ給ひ頸ながら延て甘ん待れる将軍工藤三親後斬ふ擬れ
湟の袖とぞ濡〳〵る厭ふ共是の御後ふ之廻り洗ふ斬れ〳〵
たり共ふ側めたの方よりそ是の御後ふ之廻り洗ふ斬れ〳〵
くれども清果てぶくふ刀共折曲ふ修行
られいてそたり共捨てそ涙ふるにぶゆれ斬ふれきれと斬ふれと擬ふ
ふ変ふ墨染の衣着より〳〵る修行人目を盗ふ駒ふ打乗て難波おて
馳より〳〵る其色の者ども嗚呼最惜あの松原の中そ世ふ為ふ君共
ふ修の只今斬を手ふ汚どやと所の者共ふしくと走集りくしばし僧ふ之多さ
ふ難波ふ揚て招きくるゞ猫も貴ふ為ふさふ着る笠共脱て指上聲共揚て
ぞ招きく北條ふ細有とそ待所ふ伝行ふく馳来り更ふ馬より飛下
り是を見共ふ法をう錣倉の御教書是ふ有とそ是ふ北條是共
招て只今ふ誠や小松ふ住中将維盛ふの子息六代御おふ助おふして此ふ高
雄の聖ふ大覚坊の児ふ法ふ擬ふ斬頼ふ修行ふ擬ふ斬頼朝ふ修行ふ擬ふ斬
ある小條押ふく三遍讃て神妙ふくふ指ふれふ是ふ斬ふ
乃ふ小條ふの即等共ふ都ふ置ふ共ふ斬ふ文覚坊頼
りをう許ふ御ふ共ふ都ふ置ふ共ふ斬ふ文覚坊頼

孫彦小條ふう討ふ文覚と云ふ坊主ふ有ふ文覚ふ平家の滅ふ為ふ
ふう切ふ今ふ石橋のう又世可ふ布の事ふ物語ふ相州田越川ふ
絶ふ斬ふ今ふ田越川のかゝふ六代御ふの墓ふう
事孫倉志ふも書ふれふ
是非ふれふ明

頼朝卿富士川
出陣の時源九郎
義経陸奥秀衡が
館なるひめもす
山鳥流川の岩そ
兄弟対面して
平治の乱より
絶〳〵久〳〵たるから
の親と咲や喜悦
一中節詩ふ
栄耀の夢鄭
〳〵〳〵舞々
なごんん歌と
蔵そう半紙
俄まろ

三嶋まで九里半當驛中徒町より富士徒町神祠あり例祭九月十五日又社頭小徒田茂神淺石あり又神寶ふ雌雄の獅子頭大なり
新田町ふ三王神祠あり例祭九月九日社内ふ富士の牧狩の時見へし
沼津 三枚橋町の小の地名く東海
道ふ大岡乃ひ鞠子の牧狩御所と記せ
三枚橋いふ一ツ家ふ有ゆへ名とす

車返し 元の紀行 車ゆへといふ里あり此家ふ有ゆへ名とす

和のやどりかとみよく麻乃さむしろもかさねてもかるほどもなき夜の薄衣哉

乃該寝もかくやあらんと覚ゆ

おもしろき所なるゆへ名所圖會ふ出せり

吉原紀行

車返といふ所ふ出り幡幢をたてゝ旅客ふ茶を売ふ

旅人が土城にそくうて孔子ふ着るうひ小童の云車ふ家の
ふ乗ふ本をとゝれるよりふ名ふ出ると覚ゆ

乃該寝もかくやあらんと覚ゆ

おもしろき所なるゆへ名所圖會ふ出せり

吉原紀行

車返といふ所ふ出り幡幢をたてゝ旅客ふ茶を売ふ

旅人が土城にそくうて孔子ふ着るうひ小童の云車ふ家の
ふ乗ふ本をとゝれるよりふ名ふ出ると覚ゆ

元行

和のやどりかとみよく麻乃さむしろもかさねてもかるほどもなき夜の薄衣哉

辞世
くろ髪や鶴の林のそそれ
自画賛
うかりくくと我も世の憂もそ一ねのそ雪
詼諧
世ゐ絵のうそさうみしくれの昼やうこ舟

宗徒法師の印の如き墨くろ姓は二善氏の飯尾にして洛陽の寿ふ住せし人なり
のごとくにて東行の宮道と称ふ世み鷺一ふ多く濃ふもり東路の品掌縁ふ拠て
より称名院と改め緑ひ二光院寛雄卿へ傳へられ
傳授院免め洛ふ給ひ二光院寛雄卿へ傳へられ
王中院通勝入乃也尼軒へ施ふ細川三位法ヶ玄旨逝去八条智仁親
ふかられ宗祇法師より連歌の秘法を受ふ後ふ尾法皇ふ到くた成しの
ふ

頼朝義経初対顔地 蜂起ふより九郎義経の軍勢冨士川まてお陣の附頼朝ては
奉りて出ふ長の後再ひ対面しふ事

東鑑云
治承四年十月北日武衛頼朝令ン遷ニ宿黄瀬
川ニ給ヲ中暑今日弱冠一人御旅館之砌リ称可レ奉レ
謁ニ鎌倉殿之由上實平宗遠義實等惟之不レ能レ執
啓ニ移ン趾之處武衛自令レ聞ニ此事ヲ給ヲ思ヲ年齢之程ヲ
奥州ノ九郎即ち輙早ク可キ有ニ御対面一者仍テ實平請ス彼ノ人ヲ
歟而義経主也即チ參進ス御前ニ互談ニ往事ヲ催ス懐舊ノ
之涙ヲ中暑此ノ者ハ平治二年正月ニ於テ禰ニ孫之扶
内ニ逢テ父ノ喪ニ之後チ依テ継ニ父ノ跡ヲ成ニ長成之
持ニ為ニ出家ノ登ニ山ス鞍馬ニ至テ成ニ人之時ニ催ス會ノ之
思ヒ手ニ自加ニ首ニ服ヲ悴ニ秀衡ノ之猛ニ勢ヲ下ニ向ス千奥州ニ歴ニ
多ク年ヲ也而テ今ニ傳ヘ聞テ武衛ノ被レ遂ニ宿望ヲ之由ヲ欲ス進ニ發ニ
愛ニ秀衡強テ抑ニ留ス之間ノ密々ニ遁ニ出テ彼ノ舘ヲ首ニ途ヲ秀衡
失ニ悟ニ之術ヲ追テ而奉ニ書ヲ信ニ忠ニ信ニ兄弟之好ヲ士ニ々々
継ニ信忠ニ信ニ

千貫樋 三島の駅のおおあり伊豆の
堺おして青沼一千貫とをして小川あり
よりあへ海へ流ふ樋あり市ふ
海々くして増減ふ
所有て水源自在ふ
利ふん上方へそそをされと
こふふうてせよ名物
駿豆両国堺 則ち千貫樋の下ふ
名乃の国さうい

箱根駅まで三里廿八町此国都合
入り境ふて二十六中仏掛く小
の旧跡く頼朝つの配所
蛭の小島も小糸御中ふたり
伊豆三嶋神社 三嶋駅中ふあり此神大月次新
十六夜日乃
嘉ふ三嶋の神乃之そ
祭神大山祇命 相殿四座神祇社説云天ま五癸酉歳鎮座。和漢合運
云神宇天ま五年十三嶋明神出現
日本紀曰伊弉諾尊抜テ劒ヲ斬テ軻遇突智ヲ為ニ三段ト其ノ一
段是為ニ大山祇神ト一段是為ニ高龗

神代巻鈔云伊豆國賀茂郡三嶋神社摂津國嶋下郡三嶋神社此三所俱二神也
鴨神社伊豫州越智郡大山積神社

末社

見目祠 楼門の外西側にあり。八幡宮 二王門の外西側にあり。巌嶋祠 社中にあり。
東五社 舩守社。飯神祠。酒神祠。倶に本社の後東側にあり。第二祠。小嶋祠
西五社 本神祠。第三祠。聖神祠。倶に本社の後西側にあり。天満宮。大嶋祠
別宮八社 二ノ宮三島駅中嶋町にあり。三ノ宮日駅田町にあり。四ノ宮日駅小浜浦の内にあり。五ノ宮日駅宮倉町にあり。
田川祠 三島駅より小山村にあり。天神祠 日蝕川原ヶ谷村にあり。
祇園祠 神領内祇園山にあり。祓所祠 三島駅中後村にあり。豊磐間戸命祇園祠 御影間にあり。
舞臺 本社のおもてにあり。隨身門 社頭にあり。楼門の外にあり。
鳥居 一所は楼門の外一所は海の側にあり。二王門 楼門の内にあり。三層塔 二王門の東にあり。
神池 二王門の内にあり。鳥部屋 楼の下にあり。神馬厩 楼門の東にあり。藥師堂 本社の坤の方にあり。
寶藏 神供所 倶に本社の東にあり。馬場 本社の東にあり。
例祭 七十五座の内大祭正月元日日月十旨甲申日八月十三日十一月中酉日 神官矢田部氏社家三十六人

東鑑云
治承四年十月廿一日頼朝乗燭之程令詣三嶋社給御願已成就偏依明神冥助之由御信仰之餘黙止當國内奉寄神領給則於寶前令書御寄進状給其詞云
伊豆國御園 河原谷 長嶺 嶋大明神 三
右件郷園者為御祈禱安堵必所寄進如件
治承四年十月廿一日 右兵衛佐源頼朝朝臣
前右行紀行

伊豆の國府おいつめられそこを三嶋の社まで矢うらあそこまでに
松のにしこくおもはれて庭のうへなる神さびわたる木の屋
しろい伴うの國三島の大明神とうけいまつると聞きて純固
八道伊豫守實綱が命をうけて京よりくだりける小笑早乃
天つ雨暴かぜふきてかなとうちたる稲葉も忽ふきちりぬる時人
くもれ御社ぞうされば神なびのもりもかしこくおぼゆ

せきもりの門出の神代のおもかげもそのまゝにてまつこの神 光行

按ずるに伊豆の國府にある名鉢小田方郡とある三嶋神社は延喜式の賀茂郡四平方里の内大社とあるまうし又鳥丸光廣卿東行の時霧雨して伊豆箱根へもかゝる色さやうもおもしろく詠ぜられて此社をも詠ぜられたるなり



天の川井園の名水せんとうよ今も三鴻の神形ぐは神　光廣

かく詠ませたまひしかど神威ましくてたちまち雨止んで晴天となりぬ

支當社を攝州豫州三所共に三鴻と称して大山祇命伝承ありと読ふいへ三鴻と大山祇命伝承ありと神秘あることいへれど伴緒なく神道ことに三鴻龍雷傳にて神秘あることいへれど伴緒なく

依因法師の祈りたまふに先廣つに止雨の和奇蹟なり名業の祈りし

三代の將軍九代の執權共に恭く恭禮厚くして田園祇宮柱

壯麗にして社頭巍々たり代神の使令にて神徳ふ鷲鷹水に戯れ神

雛ふ鴈鵝麥り驛の小川魚鱗多く生ずるふ紙柏だふるへふ

いふ〳〵より暦代製衣て社家ふうあたれを三福暦とふ神肌や豊みてふの

恵ふおもひきもの敷の若い諏々ふる松の彩ふ交り鈴の聲ふ虫の音ふ通ふ

初てふふ滅座一ねんより一千有餘家代れども神徳ふ日々ふ新ふして

ゆきの貴賤まがきふ詣てまふ代の久しきふ代ふふねふりふれと賞ま

本宮
末社
末社
末社
末社
末社

八自社

正月六日
三條家



陣屋
陣山平起白鴉

走湯山　三湯より南六里許ありて伊豆權現小嶋小松にて伊豆國一宮三嶋大明神の御山と称し頼朝公八百部走湯山に籠らせ給ふ事三七日なり東鑑に見えたり千部の願円成の為なり本社拾弐所別當成就院と称す

伊豆の國山の奥小川の湯のくさぐさ

龍之湯　武町詰山下にあり巖間より湧出る小走湯の名あり龍ハ二疝よく聞ゆと云

熱海温泉　走湯山のうち乃方七里ばかりにあり熱き湯そゝろて湧出る湯口五ツあり諸人入湯に来る湯門法齊湯中湯風呂湯川原湯浜の湯等の名あり土人云湯の名ハ呼ばず大湯風呂とのみいふ

古々井杜　伊豆權現の社地にあり

拾遺　よろづにたぐへもてくと帰郭公ほとゝぎす

月　思ひ出ることゝ井の杜乃木ぶかき森をいでゝそ

葬禮法師ハ八幡の宮の本ぶかくて伊豆の國より流れて又のぐ〳〵五月の内の大賀の三位うせぶかくなる

須拾　五月雨こゝ井の杜乃時鳥人まつ声をきくよ亦人の袖もぬれとそ

郭こゝろ

左馬頭光
入輔
右京亮房
大貳三位

興小嶌 伊豆の海岸

新後撰 箱根路我越くれぬ伊豆の海や沖の小島小坂の上ゟ見る

富士見平 三島より海道箱根東五里許ゟあり三島より今井坂ゟ半坂ゟ畑宿ゟ箱根路我越くれぬ伊豆の海や沖の小島小坂の上ゟ見る

其日より高早く宿初ゟ塚原白太汲ゟ

此の山佐兼坂ゟ七面祠佐兼顕国寺ゟ

谷村下長坂笹原村ゟ宗閑寺ゟ

蓮ゟ辻ゟ豆助堂ゟ下田へ道ゟ

いづれ正面ゟ富士山ニ係の松ゟ

山中古城 今見平の東ゟ山中村ゟあり小田原ゟ

なま氏勝国宮豊お守等ゟ命じてゟ城ゟ築ゟ小原左衛門

小泉征伐の時関白秀次中村一氏ゟ

重綱先登して勇威ゟ振ひ味方ゟ

物ゟ大勢討死して氏勝敗走ゟ

蔵城ゟなゟ塚堤ゟ町くづれ左の方ゟあり

豆相両国境 山中村ゟて小松本ゟ

塚ゟ見平甲石坂ゟ甲石ニツゟほゟ

風越峠 国境のゟの名ゟ左右ゟ

峯石坂ゟ赤石坂ゟ

宿の入口ゟ芦川町ゟゟゟ駒

ゟ絵ゟ

字ゟ井白性堅くして住ん

箱根外ゟて名産ゟり

山路来ゟ何やら白うまみれ草

箱根 相模

関在境所ゟ出ゟ

駅ゟ箱根山の麓ゟり小田原ゟまで四里八町ゟ駅、中ゟ関門ゟり月冬 草句日

駅ゟ箱根ゟ

足柄の御坂ゟつゟ西連箱根の山乃あきんの一ゟ手 樗人兎

寒蓮集

十月はうゟ東の方ゟはうゟ

ゟゟゟ箱根とゟゟ越ゟ

ゟゟゟくゟの常ゟゟ

くゟゟ遠ゟ

旅の空雲ゟむゟゟ

過箱根山 猶是痴行人

客路辞郷垂泫旬 千山樹花開夏似春

單衫雲濕晴疑雨 老樹有朱陳

仙鯉潭清無網罟 午雞村遠有煙隠

珠蹤未識何時定 仰望愧隠綸

耳酒とそく侍仏宮や壺をみれ 斑竹

寒菊

箱根の湖水

西の原七曲堂



箱根の驛

箱根
権現社







泉式ア

おもふ事しも
ほろゝの枝も
たゆむまで
ふりつもる罪のかそへる果てや



小地獄

小地獄

箱根湖水　一名芦の湖と云ふ箱根の山嶺にあり長サ二里餘
幅二十八町其一ノ名を理海と云ふ其中ニ
浮島ハ緑暎赤く綵魚ハ山中の
溪川に遊ぶ小児五雨の始茱萸の
未だ
丹くしけそこねの山乃峯
紅葉紀行
たりもるか中やま谷ばろ
乃湖水へ多くの海のすゑ
うら〳〵来櫓宗廟乃雲ふかき
れ巌窟石龕の浪のそこ
たゞよふ船ハ浮身のの
るけそ
今ゝろをあひそれしの乃海の
うえにあり
月もまゆしく氷ふく
ゆるされ箱根の女
箱根山金剛王院東福寺　箱根山ふもとにあり古義眞言宗　箱根駅より初音町薮原
隣三家村にて石仏阿原といふあり此地蔵堂に
権現坂より元箱根へ到る山かたに
箱根権現社　祭神中央表筒男
右ハ花岡耶姫命　例祭六月十三日
末社　駒形神　能善祠　大師堂　寺社の右にあり弘法大師作　行者堂　役行者作　弘法大師作　側ふ
獅子巌　行者堂の　御供所　石だんの側ふあり　薬師堂　石階の下那智の
親鸞聖人堂　日前権現社僧よりの
聖人東国往回の時此所にて
留まり　神託ありて
国家安穏　本尊薬師
道の傍ふる我拳石しるしあり
の時剱と炊く那智と其か半
寺訳
そ礼当山の初ハ聖古仙人幽居の地
偖〳〵もや孝安帝の御宇小湖水の中ふ
〳〵欽明帝の御時ふ韓国の高根権現ふ勧請〳〵山ふの形

そ箕根山と号け湖中の峰石に銘を巌にしるし又一宇に建て善門
品に誦し今湖中の堂鴻応に役小角も登山し行基大士も
昇臨して東福寺と号し山岳林泉小名境多しといえ都率の内院小
表して四十九所の名小弥勒の天宝勝寶年中に隣巻上人鹿嶋明神
の神勅に依り湯に止め当山に練りとる事三ヶ年に神箱根三社権現に
出宗て上人に中祖と仰ぎ諸経の読誦一万巻小及びたし尓爾ども未諸人
満巻上人と唯文間水の西乃園小九頭の天龍有て時々乱波と空一民に
悩に上人の涼剛小臨んで神咒一巻を毒龍水上小現ず即鉄鎖の咒縛
しめべ大樹の下小繋れ永害心の守護神と成んまに依て箱根三所権現
今多に弘仁七年に万巻上人勅に奉て上洛し帰路小到りて三品楊
那那小於て入寂し従者遺骨に依て当山小納む是に依て東原山新光寺と号し又の名に
小箱根とも号し其後孝謙天皇より後桃帝まで七代の帝王尊敬有
て神社仏閣巍然と弘法大師慈覚大師もまつ小止錫し花山院の皇
子豊覚法親王当山の座主職小任ぜられ時金剛王院の勅額あり山
法親王の御孝養当山の別当に成動し日まで行賞信正もまた別当に成
武門に田村将軍。源頼義。右大将頼朝。小條時政。義時。泰時もみな尊
恭し曽我兄弟祐経に討し徽塵九蕩緑の石乃も後小頼朝より当山
小玉ち付しのひて什寶と多る其外寶器多し時去星移て小田原陣の時兵
燹小罹つもむかしの十が二ふも及ばず東田碧石海須更小あらざるの潸然ど

当山名所四十九所

宮住山　茅野ヶ嶽　地蔵山　不動石　御嶺浦嵐　横岳　伊豆岳　芦ノ池

駒ヶ嶽　墓ヶ嵩　孔出山　諸供川　馬乗石　鷹ノ巣石　日代本　羅漢杉　石室　花川岳　進ノ池

賓蔵嵩　お山　二ノ川　供山　遠川　五条石　福徳石　矢立杉　白川岳　桃ノ池　蓍ノ池

明神嶽　文庫山　ノ川　吾妻川　ノ池　蜂ヶ池

東鑑曰
奉寄
相模國早河本庄
為箕根別當沙汰
右件御庄者前兵衛佐源頼朝朝臣
寄進也全以不可有其妨仍為後日沙汰注文
如件
治承四年十月十六日

同書曰
安貞二年十月箕根山神社檀佛閣燔亡當社
垂跡滿月上人草創以後五百餘歳未有回禄
之例北條武藏守泰時頻歎息潛有解謝之義
被奉頭書仍造營十二月二十八日遷宮

神社考曰
伊豆箱根ハ者。本社彦火火出見尊也。又有駒形
權現。白和龍王。右鵲王及客人ノ宮雖又
有役ノ行者。吉備大臣。弘法。慈覺等ノ遺跡

箱根温泉

七個所ありて七湯巡りとて衛道小標石あり
○生死池 標石より。頼朝卿狀書石 由あらん
六町あり。 ○葬の池 此池の傍ら法藏比丘尼の
元西阿原石地藏 此の例より自然石乃
云傳あり

長さ丈余弘法大師
彫りしとぞ。多田滿仲石塔。十二光佛石像 共に地藏尊の
次にあり

○曽我兄弟石塔。虎御前石塔 共に叢の中にあり土人これを曽我兄弟の墳と
石塔ノ傍ふみ入一抱えその所へ葬るといふ

△芦之湯 七湯の其一箇所にて權現坂より
坂を下りて入込れば能く浴し苦しき
功能ハ癩病 黴病 血症 一切の攝物ある
湯屋の戸前の柱に札を打ち置く

△氣賀湯 芦の湯より三里半中ふもとの湯
中ふ岩湯上湯 平の湯 大龍寺の湯
湯にして何れも硫黄の香あり

○小地獄 芦の湯より八町許ふもとの湯
地獄 按ずるに權現 證驗 僧房の地獄
硫黄と称するは温泉の際なり
なり 地氣蒸し
ふもと地氣立昇る所あり
里許ありて土人これを紙洛屋の地獄 地獄
大ふも地氣立昇る所あり
とよぶ

△底倉湯 氣賀より半里中むら 底倉湯より三町ばかり 温泉の水脈より通ふて
因湯二三ヶ所あり 此所の民家 箱根名物攝物細工所
地震ふりて名ある石風 絶て今絶よ

△宮下湯 底倉より三町ばかり 温泉の水脈より通ふて
瀧ふりて家の内より瀧のごとく温泉湧出
頭痛 疫痛 腰の痛 治れり

△堂嶋湯 宮の下より五町ばかり 温泉湧出
水 鹹くして 積聚 疝痛 治れり

△塔之澤湯 堂嶋湯より三里ばかり 七湯の中にて地獄 硫黄の
風景 最よし 山下に内湯 洗湯あり 氣
箱根山と号し川と駒嶽山と号し川と駒嶽とよぶ

いまふし記

あり。国訴の湯場なくて足弱老人は吉原本湯まで早川の水乃伊
橋成王堵橋とり水戸光圀卿眼人舜水と共に名づけ給ふ道遥一名
吐月峰ともよべる。此所より見る富士の景色江府より諸侯時々おとづれ
成小川屋太右衛門内湯ハ田村久右衛門家数十三軒あり。此温泉
軽くして毒気なし。湯かり諸病癒ゆ。

△湯本湯　湯も二三ケ所あり。橋を渡りて四間ほど仕切る。
五町許あり。此所と歩て橋の東仇名を碧毒嶽病の癒ふこと神の如し。三枚橋へ
あるべきなり。東海道へ

箱根山温泉記

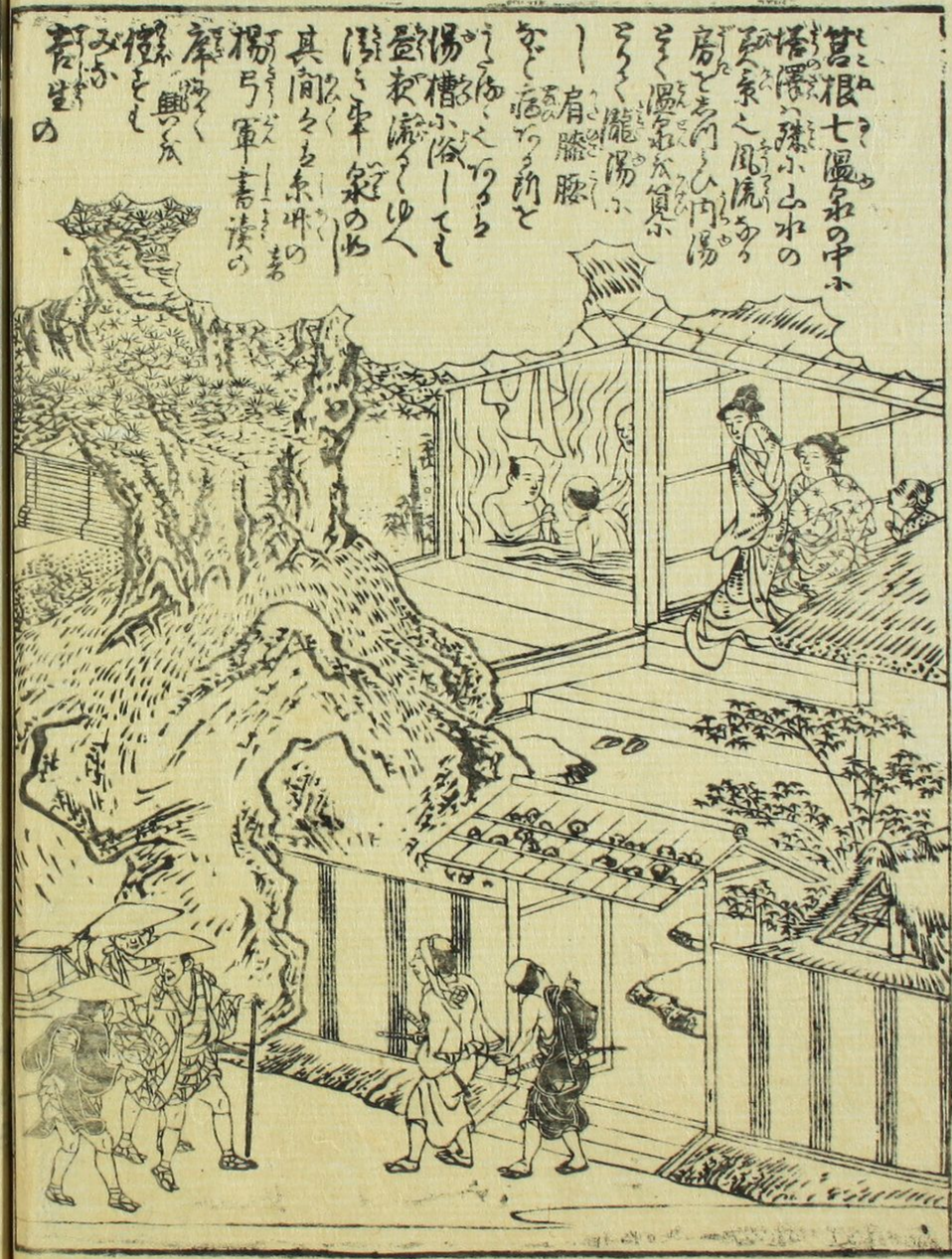
相模国箱根温泉ハ白山妙理権現ましますの所なれバ其神力広く
諸病悉除のまことにほどこし此湯ハ入浴する人息災延命の楽保ことに
とし年前に山湯本ハ小田原の面十里ほどの所山嶮一ツ隔く数
代も動き給ハぬ岩根ありて久世も栄えぬれバなり。三つ葉ハ放光堂
あり。廬慶法師ハ化れて桃源井ハ安重三備世界衆生の悪言たて
くおはします。東ハ三峡橋とりて岸のなりうの小巌峯也。富士岩根なれバ其上

より時ならぬ雪のふりかゝりたるハ小田原の領主大久保加賀守忠朝公
おごりて其峯ハ通ある湯谷多しと雖も小田原の湯ハ入浴する人
養性の助ハかりなり。学問を好ハ一分妙理権現ハ天地開闢
物中のいわゆる尊とおはします。女神なり。見あらハれ
都元正天皇の養老年中小泰澄大徳越路の白山ハ小祠なりしを
示現ありて我成信敬を加へ給ふ。我うち成
見ハ心寛にて九かうのお百姓ハ小祠なりしを十一面観世音ハ
妙相端厳にて拝まれ給ひ。泰澄威徳成就ハ捗て時いう機感にて今
かくいやまさりに見ハ成就にて小大悪成ハれくわの神くらくひ
動くハさきをいのるべし。聖武帝の天平八年小疱
瘡のえやみ有て上中下ハ五畿の内ハ流行甚しくまねく

といひて猴人ども多くの物ども乞ひ得て小
森權の神社淨定即ち者して有し卧行者ありあの國小淨定ねわたりぬのち
さたりちほそして枝母ありし小世の中ねたりき年十年に淨定ねて
卿社ねて白山權現ねねて又十一面ねの多く成りぬ小
ぬ山の岩根忽ち裂て温泉涌おで長く諸人のふく栄えぬ九百四十餘年
成経て今の世く平ふ都 後拾遺院の大和の物ふと小泉の式綱の祀
特賜正宗大薩禅師どむとあぬ桃小早雲寺成その温泉のやうふく
春のそれにつき成愛して落室成甚ほどう小間ふまりて金湯山とり
中頃久く成湯寺桃小屬せ一成ぬ祀百年ふ
ぬぞうふる事ふなりけ先ぬ里民の家形もかで彩ふるとに世の人埋木の
人きねぬ新ふ成ぬ湯の志ふ成ぬ湯の志ふ成ぬ祀百年ふ
近く来たつねふ其利とうふうて家潤ひ里面つかぬふの煙も湯のふ
小立ちて猴ふ桃まふ成ねそ天刑の病人のいねぼきち日わふとれぬ湯

変じて小ふ動ぬ人毎年湯の口ふ
志ふぬ一辺ふ世界ふ湯井ありとい
四ふふ山を湯成ふ人の津の國ね有馬の出湯ふ三輪の神垣神ふして醫王
善逝の勝地ぬ成國の湯年の湯自然權現の垂跡観音應験の霊區ふぬく
ねぬ豊の最のふそふの國ふその主房し成てし
月日の多の空ふかしたるやうふぬく
ういえんふて神女の出るふうひ待ふ成
日々ふちうふのふふふふふふて
観るふ慈眼ふとして衆生成ふ甘ひてぶ
ふ湯の流のふ病ぶぶうふ手ふ業ふて
永禄の二年廿月後の三日落湯の頃何ぬ社ふ小應ふ新王津山島の
七杖ふ筆成やうて新曲志侍る
中の社司野ん氏ま勤延賞貞ま須
行書若干成註解ん嘱吟苗蔵等の御所

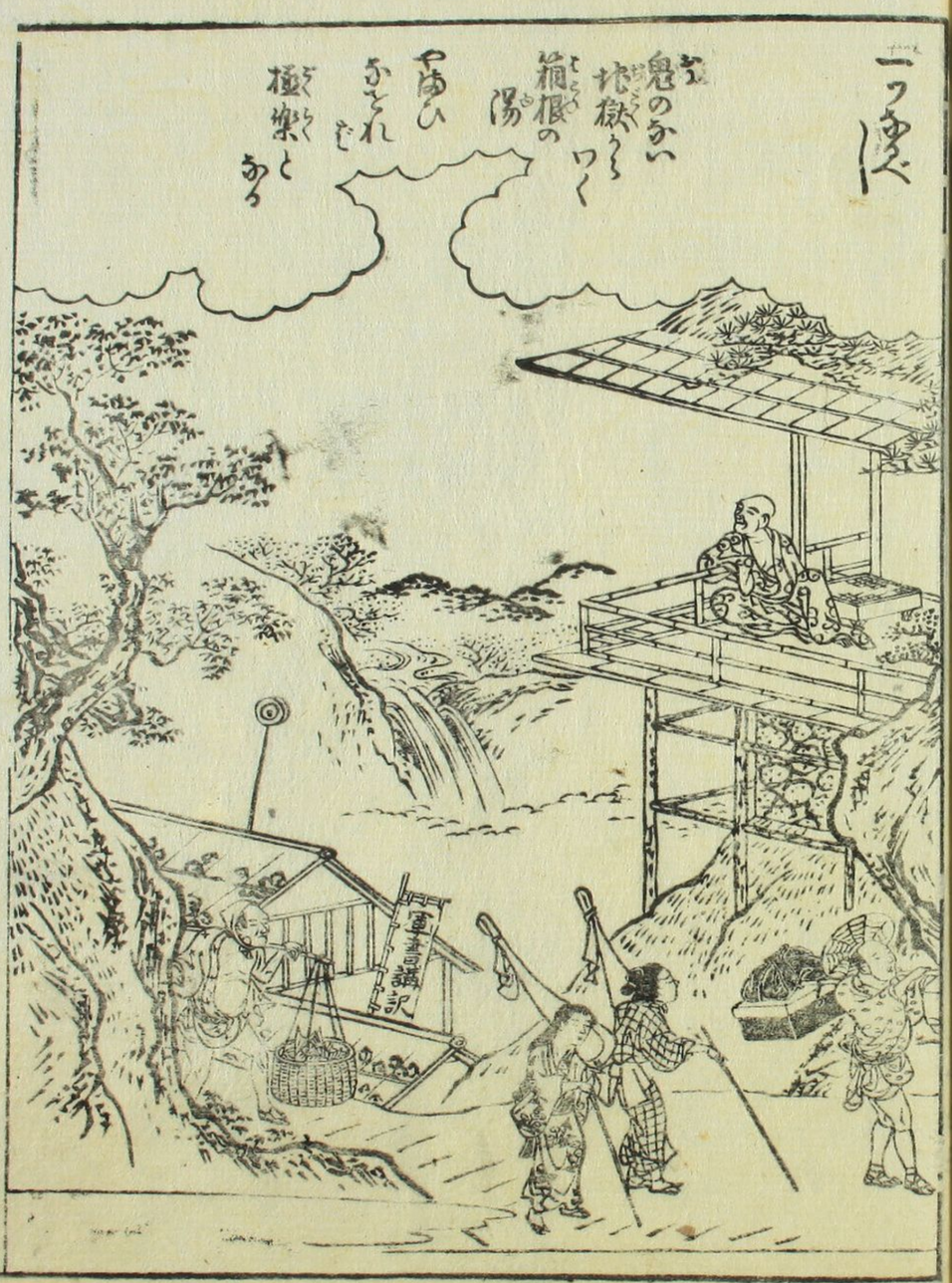
箱根七湯名の中ゟ
塔澤の殊ゟ山水の
美景と風流ある
座敷ゟ内湯
ゟく湧名水負ゟ
ゟく龍湯ゟ
し肩臑腕
ゟと疲ゟ労ゟを
ゟ湯槽ゟ俗ゝても
登夜流ゟゆく
湯ゟ中ゟ衆の湯
其間々ゟ糸竹の
楊弓軍書讀の
座敷舞の
催ゟもよ
みゟ
書生の



一つ湯

鬼のかい
地獄ゟく
箱根の
湯

おゟゆ
ゟそれ
極楽と
ゟる





箱根名品挽物細工　御道湯本村ニ有

金陽山早雲寺　陽谷村にあり禅宗瑞家金陽山の
總朝鄭雪岑の筆方丈の額同筆
佛殿釋迦佛　岡山正宗大隆禅師作勢
新九郎長氏永正十六年建立
北條五代墳　寺内にあり宗祖法師墓　墳内にあり又傍に
北條新九郎長氏の名早雲伊勢平氏の末裔にして桓武帝第五皇子葛
原親王の末孫平清盛の後裔と相州小田原の城主となる法諱
宗瑞と號す一九十歳にて薨す其次氏綱堂井薨す其次氏康
次氏直まで五代の間國を八品河領す皆此寺に葬る墓域嚴
覽箱根員葉作
諸聖悲羣蒙摟扶死生源有身諸患本
七趣爲焚園受身何所緣靈識是其根
識質相纏繞萬苦不堪論飄揚同野馬
騰躍似囚猿不驚三有夢何酬諸佛恩
縱聚河沙福敷皷耦迷一魂雖說精眞道
無殊酬醉言琅函如五陵須知要領存

食息警遺忽潛思歸至尊

江陵　萬菴著

早溪　箱根三嶽箱とは箱の陸の下流なり
して早川風小庫風元の人早川
の方より敵山に入て中ふれば
嚮石掛とり人所小庫風なり人孝
泰儀中將範茂小泰朝時擒
中　況や空しく武のいぬ又元弘
朝一年なり記

長興山淨泰寺　入宇田小あり又入生田と書は非なり
小田原石出る禅宗叢林
佛殿阿彌陀佛　惠心僧都の作本像丈八尺許開山
像堂照堂牌堂鐘樓寫殿泰翁軒の額等嚴
重之門内より石階八十五段三百餘年の古松
見事なり之傍に寺領倉納ありて風色絶勝

豐太閤御陣所　宇田の東風祭村の有石垣山之天正中小田原攻の時豐公居城とし
給ふ所小蒲生飛驒守の陣所あり又海面眺望とも
南おあり蒲生飛驒守の陣所あり
石橋山　小田原の入口にある里許南おあり
東鑑文治四年八月廿日條祐頼朝に大場の三郎景親
三千餘騎にて襲ひ頼朝つゐに相山小陣にて平家方大庭三郎景親
備ふれ共免れ去て後の峯に退く

間小加名次景廉大見平次實政武蔵の御後小半く景親氏法ぐ
北條時政ハ君氏ヲ思ヲんとして數町の險阻ハもる處頼朝ハ節よの
中小臣ハく實ニ時政等其後小候ぐる氏ハ實ニ名無るの
參とされど喜びあうとハくぐも人数氏率せ一めもろ氏小ニ遠ん等
吋の雅一御一身小於てハ縦旬月氏ハ陸もとで實ニ計畧氏加ハ一
なるべしと人北条四郎ハ箱根陽坂と唐く甲州小赴んとん小条三郎ハ
土肥山ヶ寒原小ハる大庭景親ハ武備の跡と逐ヶく小谷氏捜求る事
ろど時小梶原平三景時ハらく者あて懸小御在所氏知るとハ一も有
情の慮氏ありハ中小人跡形ハらくて景親ハる氏曳像の姿ハ摯ど
る氏間小武衛御髪若の観ニの像氏出一ハる巌窟小安一なる實
ニ其意氏同なる作小ハ貢氏景親等小依ろの旨氏奉氏ハ源氏の
大将軍の初めハなる方のろ人庄て就と貽ろべ一件のそ像ハ氏三歳のも一
乳母佐木平秦竜セも襲児の将基氏初ろ事態篤ニせ二百日氏歴て

霊ニ及氏蒙り忽然ろて二寸の根乃正観ニ像氏感得し帰敬をるニ依
ろ小条殿相山の陣小参着し営根山の別當行實駐飼氏持ハて
武衛氏召る小陳屋ニ喚て将の御ニ永小相具一件の貽飼氏献ぐる私
餞小臨むの時直已小千金ハろとも

大礒まで四里小田原北条氏網の時京都西洞院綿小法外良ろ人者公禁
下り家方へ逃隠居氏編へ其由儲へ濠倉建妥寺の開山
大道見軍阿未朝の時供奉一ハ渡り家方と引むる氏綱
されと霊茶ろ小田原小八ヶ嶺の居宅氏賜り名物ろて世小聞ゆ

小田原北條

豆相記ニ云小条新九郎長氏ハ時ニ鎌つく西ま小
来都小ハり足利将軍義政ろ小仕へ
居一忠功をくげ屢豆相小働き勢威氏
居一早雲と号氏武威ハよく懐んぬ
小至ろて関左の動乱氏張ぬ関八屋氏
毒塩小居一武威を八関小耀れ
糸ろ云爺小従えるる氏者ニて遠ふ
年陣と定め軍将を八方小ハて
給ハ十万氏ハりて防戦の術氏
施石炮氏ハりく城中氏ハ
誠ニふうろ氏愚小及よ

九拾七オ
ろふ原よ

小田原外郎透頂香ハ
大覚禅師朱朝の時
日本ニ伝ル所ノ家氏ニ
ありふ在城の時
八棟造の茅店
弘ムる所ナリ

三組の
トウチン香の
千里ニ薫ル
虎屋外郎

酒匂川　小田原の北小あり酒匂ハ相模川の異称とも又一名鮎沢川ともいふ小田原と酒匂の中小山王原とてあり

盛衰記云　治承四年八月廿五日和田小太郎義盛三百餘騎うて鎌倉より稲村
腰越八松原大磯小磯を打過て二日路を一日に酒匂の宿に着ぬ云々

同記云　相模國国府川を渡つゝ一時暇もうまく小梶原が孫倉岡小水とうち越て奉る

小餘綾磯　酒匂より大磯までの磯辺にて海方へ出張たる所を総て磯と云ふ孫倉志ゝ乃勝地と七里濱との間にあり

古今　ふれのこるやいかゝの波分沖小舟

旧大系所　おち残る磯の根松春風に

後撰　春風とふく波ぞ寄らしも

鶴ヶ丸　松も老ぬる事久しき故の名ならん

拾遺　いつまでか小日日をふる鶴ヶ丸

鹿　松　村仁糸小あり　由縁詳ならず

吾妻山　御道のたの方武町小あり

山上小吾妻権現祠あり

相模國府跡　今國府新宮と云ふ

たの方小六社の祢宜王権現をあがむ

日濱馬場　今四町吹切ふたの方馬場と称ふ小栗判官鬼毛と云ふ名馬試貴べし所とぞ

小餘綾杜　六社の祢の条式内所なり

加通坂　石佛地蔵ある河岸より行基の作なり長五尺餘

曽我里　酒匂川の東小八幡より北町許入る名我兄弟所ゝ山中にありて名我の中村とぞ

川匂神社　書紀今二宮の祢と称ふ延喜式小

藤巻寺　村にあり梅澤山東光寺と号ふ真言宗ゝ堂あり古木の

鹿　松　村仁糸小あり　由縁詳ならず

吾妻山　御道のたの方武町小あり

山上小吾妻権現祠あり

相模國府跡　今國府新宮と云ふ

たの方小六社の祢宜王権現をあがむ

日濱馬場　今四町吹切ふたの方馬場と称ふ小栗判官鬼毛と云ふ名馬試貴べし所とぞ

小餘綾杜　六社の祢の条式内所なり

加通坂　石佛地蔵ある河岸より行基の作なり長五尺餘

曽我里　酒匂川の東小八幡より北町許入る名我兄弟所ゝ山中にありて名我の中村とぞ

川匂神社　書紀今二宮の祢と称ふ延喜式小

藤巻寺　村にあり梅澤山東光寺と号ふ真言宗ゝ堂あり古木の

鹿　松　村仁糸小あり　由縁詳ならず

吾妻山　御道のたの方武町小あり

山上小吾妻権現祠あり

相模國府跡　今國府新宮と云ふ

たの方小六社の祢宜王権現をあがむ

日濱馬場　今四町吹切ふたの方馬場と称ふ小栗判官鬼毛と云ふ名馬試貴べし所とぞ

小餘綾杜　六社の祢の条式内所なり

加通坂　石佛地蔵ある河岸より行基の作なり長五尺餘

秋暮鴨立澤



大澤秋煙夕景深
雲古灣紅葉色酣
垂柳暮生堂有
鷺紀津
白川亞古

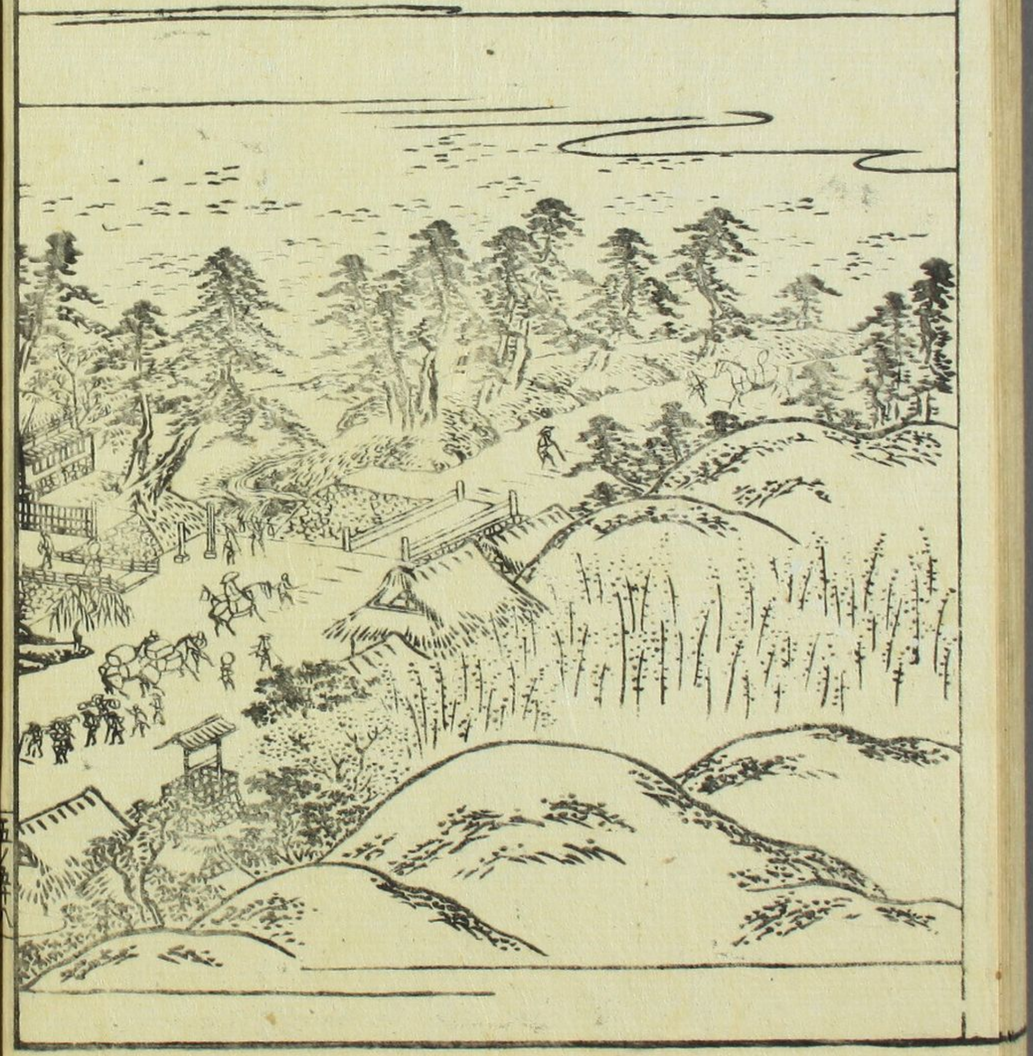
山僧停杖地陂澤
水如烟鶩起秋
天晚悲風空渺渺
畑維龍

石田友汀畫



晴立澤

晴立菴



晴立



鴫立澤　此地の物語しき小町の塚の名古今小撰に載たるこゝろの名所の其一也

秋ふかき身もあるまじきりんせう鴫立沢の秋の夕くれ　西行法師

此松も昔ハ小磯の海辺にて後人此大磯小磯の海辺名所和歌抄に載たる小町の塚も今ハ遠く隔て上古ハ通ひて上古ハ通ひて上古ハ通ひて

相模大磯

平塚まで十七町氏磯辺より鎧ヶ石あり茶店小出してもてなす當社
虎子石　駅中延壽寺小あり古石の縁起あれども詳ならず
十郎妻悼慨愛於兎血一氣成此石似望夫
高麗寺村小あり宮寺縁起に文觀僧正之例祭六月十日社前の生土神
三社権現　開基ハ文觀僧正之
祭神忍穂耳尊　社傳えなし神功皇后三韓退治の御時高麗より神威を
仁徳帝の御宇小帰朝まします神明ましく三社権現
と崇めまつる又伊豆山の松葉仙人ありと見えて大磯小妻の浪間小松
三人お面の神像伝授ありと其後霊端をひらく圓形
松葉仙人ハ日金峯小祀そう
高麗の寺村小あり
花水橋　長さ百十二尺巾二尺
驛馬進一路一野一牛　淳一自驚入一前一嶋一
遊遊眼望海一山一景　晉一人一過一花水一橋　崎闇齋

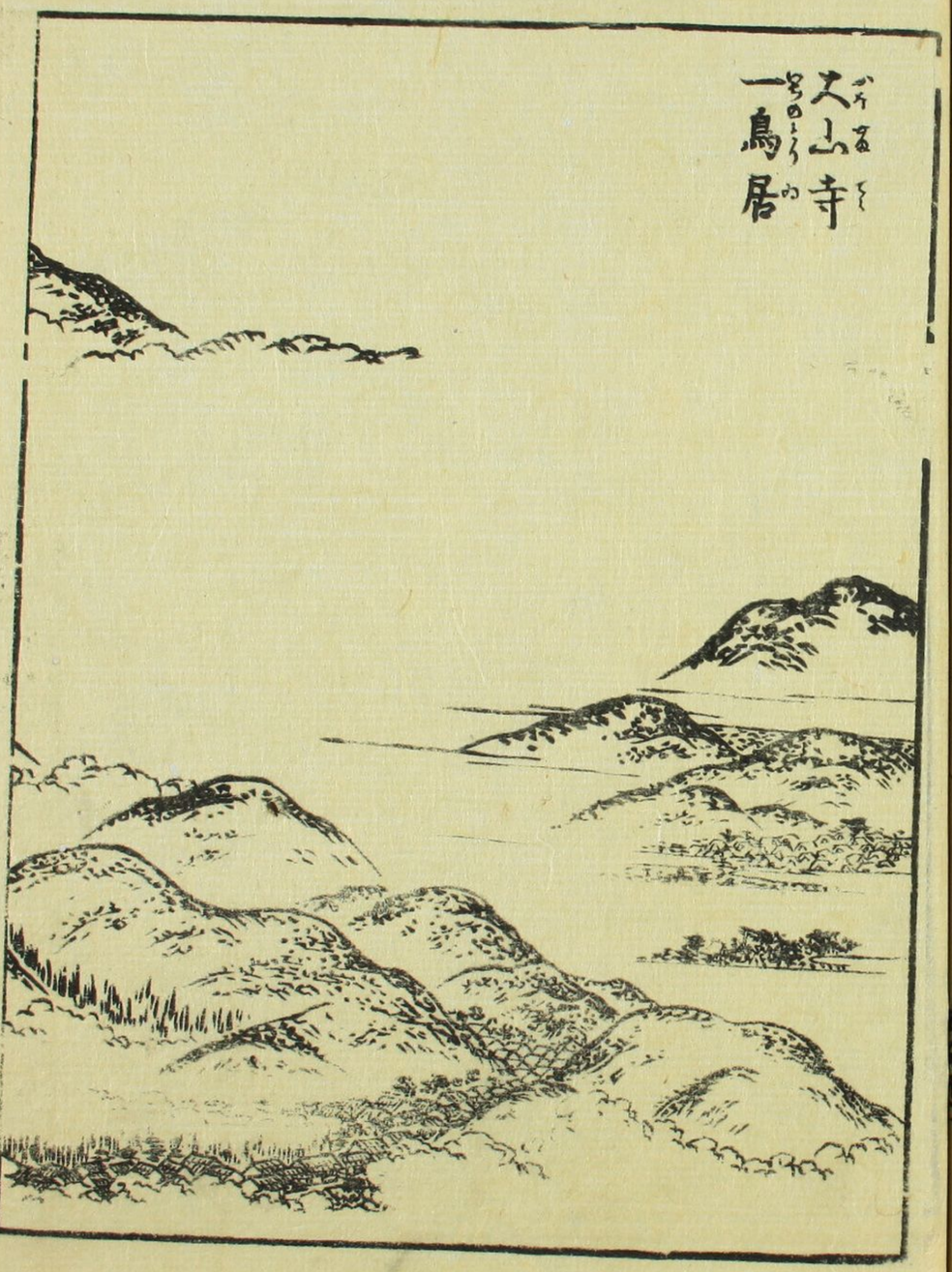
相模平塚

八幡宮　藤沢まで三里半
八幡宮ハ村小あり別當法輪寺と号す
例祭五月五日社内より大山不動尊へ
馬入川　馬入村小あり
東海小天佰四年正月三浦介義澄深沢相模川小葬一年えらう
又佰傳小建久九年十二月稲毛三郎重成亡妻の追善のため相模川小
橋供養仏會し武重成う妻い小系附政う娘にて頼朝公の御妾政子め

嫉なうられやうにて右大將後鎌小沈給ひ御帰洛うて八的原
小社て義経源家う怨霊祟ら祀れうれ見て怨小取給ひ
圍ミ助けまうせて御帰鎌ある
更小社勧かし其年も既小
往宮一ノ鳥居五十三ぐ
浦家の政ミ悪獣小附ふ

一説ニそ此橋供養の砌水上より雷電霹靂
にて其門擯朝の無馬殿小
死をそぎ小馬入川とう
うられ本能ありを手記ニ

相模入道高時の嫡子相模太郎邦時六大院右情門宗繁う妹の腹小
お来ふるお私ハ甥ミ主ミ貳心いわせとて深く嗚れ給ひ
狭んて睡ーあー源氏の侍小討ぜて勲功と得んと思ひ般田入道小黄
相模を郎の居りふる道成廣てて待ふ相模太郎入道小相待数の内
まふ永仁元年五月廿日の暮小深沢正慶二年五月廿日の暮小深沢
波らんとてさー守成特く岩の上小立ちふる成五大院右情門徐五ふ之

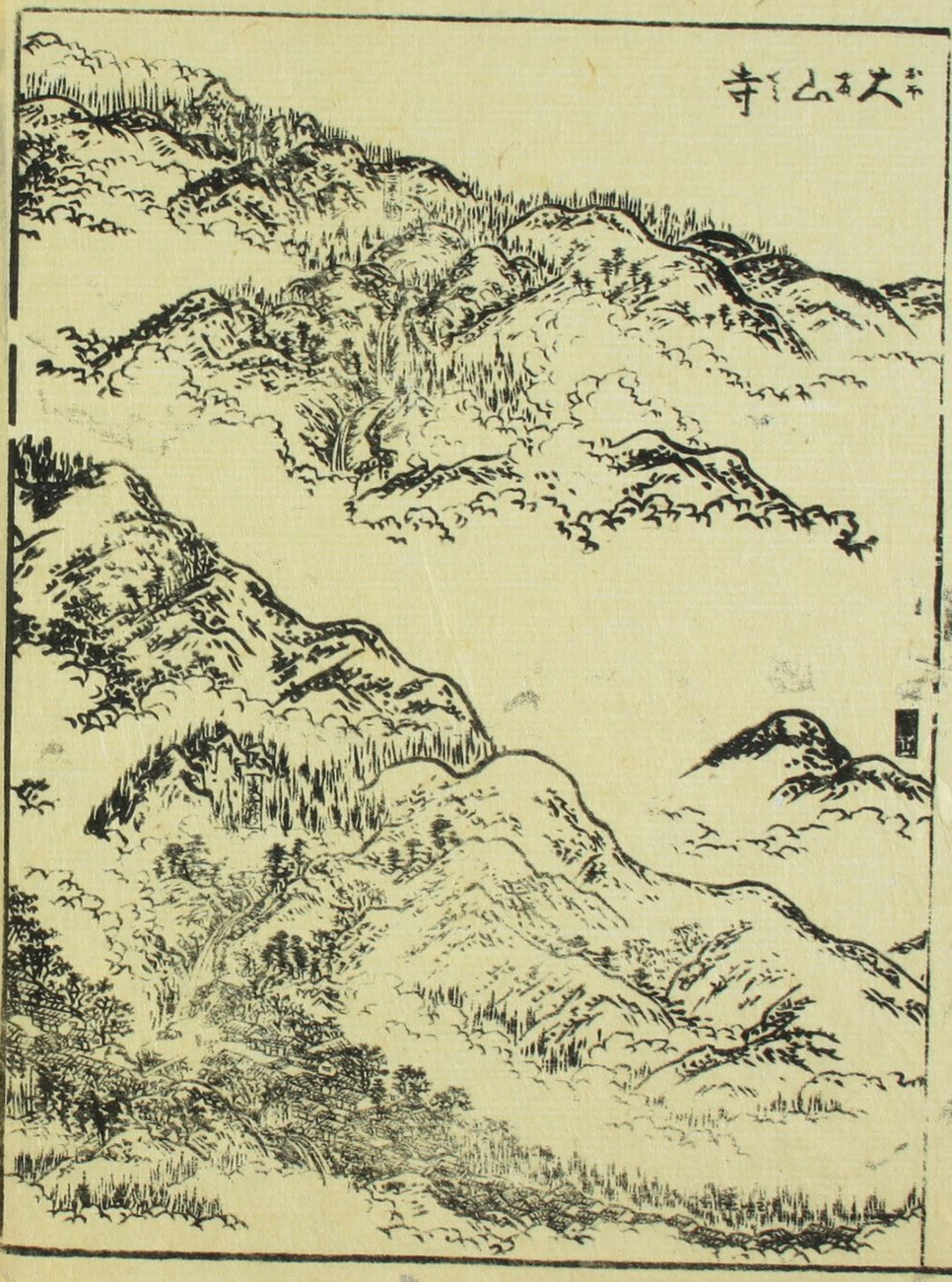


大山寺
一鳥居

てゐれども其人件の人と教えれば船田う郎義三騎馬にう乗てやう逃廻り終に生捕る体の事小て張興覚えもなくそれば馬小乗せ舟の縄よてちよつかふれば誠め中間弐人小馬の尻うせて白晝小瀬倉へ入ける是ば聞人毎小油を絞下ぬいがうくるとけん人未幼稚の身ながれ何程の事う有へくれども朝敵の妻子なれば聞こそ小非とそ則翌五日の晩際小有徒ども引き昔程嬰が義を感服して幼稚の主の命小換験護う貌と変ド詹君の恩沢報せ甚まそこを立ち五大院が心の程希有也承通こと思ふく毎小仇弾どうて悪ふ美貴實りとひれも誠よくくと内々其義定てさぐれば宗藤傳聞てあかと小隠れくるが条悪の罪身と責多き小三界廣くといえども一身置措小處なく坂籍多くやいでそ一飯と與ふる人無くて遂小飢食の如く十間坂馬人の東そ里許小あり此所ふ民巣て通路の渥ふうそ飢死くるこそ聞キ

（馬人の東そ里許小あり此所ふ民巣て通路の渥ふうそ飢死くるこそ聞キ　箱根右ふ江ふ海金沢鎌倉江発向くし所こて十七ふ新小到着ふれ瀬倉の大御堂こて対死くる津ふれもそ承記ふ見へくし）




大石寺

雨降山大山寺　相州大住郡大山の巖ふもと坊舎十八度閉伽百五十餘宇又義毛村小十九宇ある俗に上方京師より終南いわ国小田原より六里半こゝにたゝずまゐ清きる事なり

前不動堂　お女村まで五里こゝより一鳥居あり前不動堂まで八町坂路の左右茶店あるそ名物の挽わらび餅あり石段一方迄の傍もあり又八町野坂女坂の二路の嶮路あり堂前名物よりて堂前雑

奥不動堂　本堂と称し本尊大聖不動明王八僧正辨覚の作座像長五尺南面

行者堂　本堂の西ふもとにあり天照大神　日王　熊野　不動役行者は安倍晴明の作なり

鎮守　本堂の東にあり

白山祠　本堂より三町許上方にあり神輿舎　行者堂の傍にあり

鐘楼　本堂のお二王門の傍にあり

山門　本堂より二町許小ふもとにあり

二王門　本堂のお二王門の傍にあり

二重瀧　本堂より二町許小ふもとにあり

良辨瀧　岡山町にあり

新瀧　坂路八町ふもとにあり

大飛泉　一の鳥居より上方にあり

○石尊大権現社　本堂奥の方峻路八町ふもとにあり常ふ諸人の参詣絶ず毎年六月廿七日より七月十七日まで縁日にて賑ふ

道中筋大小路人家の傍ある中に

祭神大山祇命　神躰巌石にして傳記に曰く昔時此山に一神人降臨し給ふ其形状甚だ異なり頭に蛇を戴き両手に蛇を纏ひ両脚蛇を踏み給ふ其状恰も金剛力士の如し因て其神を号して雷大権現と曰ふ

聖人相州小七ヶ年経回の間ふもとより山上迄毎日二度づゝ登山し給ふ其数凡そ四百度に及ぶ其間毒蛇猛獣の害を受給ふ事なし

発明の時忽ち一の老翁現じ来て曰く我は是当山の地主神なり我此山に住して既に数千年なり今汝来て我住所を開く我其徳に感じ来て汝を守護せんと言終て忽ち不見

聖武帝の御宇神亀年中関八州総追補使として東夷征伐の時忠臣相模国藻倉陳屋を即時忠臣の祖父なり

治し其祖先の大綬冠漣子大臣の玄孫にして藻倉小在住一家富栄て一門軒をならべ盛んなりしも数百年の間に衰微し今は僅に四十余家となれり

時忠妻小苞つく玄我家倍繁栄たりしといへども今は僅に八十余家となれり

抑人是非一の慈悲なくんば且つ女の身として能く此霊山に参詣して罪業消滅し諸菩薩の功徳何ぞ小疎ならんや特に観世音の勝れ給へる事

多人聽る名とは金鷲童子と鉢を歸る勅て奉月と昏ほど小十九歳小
そ形うのひる聰明清徹の神童小して使小刃く者好し迩た師の僧正い
年齢八十おして入寂しの人金鷲寺童子尓涙し其時巡福のあるおと
たるし執金剛神の像成作ら給ふまう御足尓奈成りて引動くめして禮拜
毎尓唱て云聖朝安穏天下泰平奉隆佛法利益衆生とそ初めひる信力
通して忽御足より五色の光明放て官中成照しひる聖武天皇あれ成
夢として勅使成されの光元成見せしめ多く金鷲行者の許へそ
見る勅使回て曰いふるや光明王宮成照し金鷲着て佛法興隆の志
頭のう勅使ひし成奏達のれい帝太尓収び金鷲行者成めされ暇も佛乃
恭信の志りとおしまして其師成求し行者成是より我戒師と奉とて宣
旨のうまし金鷲禮る雑髪して良辨と申ひる甚ら帝の御帰後後
かばして遂尓春日野尓東大寺成建んもれ成大佛殿と称しひる即良辨
別當職成蒙るひ是華厳宗の監縢と在小時忠ま婦いお海辺

少そ土城國淀の大渡小着て歩し守成頼こ便私成先ら仁郎加どおしと
ら國ら心里の人も乗合ら礼ば巡ひく小ふる中小當時宗良の都
聖武帝の御戚師東大寺の別當僧正良辨と申くら甚幼き時鷲の巣
より卸しなる人とそ承る今八都成聞ふも胸騒ぎ船ふりて宗良の
らそ語ひる時忠夫婦ら礼と聞ふも胸騒ぎ船ふりて宗良の
都ら云ふる其比の寺社と巡礼し倫小我子小逢せ多く初今参ふ礼ば二人ら
おふも其いり情ふ礼ばうれび身疲れく東大寺の南大門の傍小三年の件と
ふ安東蔦成纏て悩煩ひる其頃僧正良辨春内のうちふ老ま婦の方ふう
先生ら良辨の車成駈しひう僧止性を何せ多八我を相模國の者ら一ふ成
鷲小狐れ餘成坤さのまく二十餘年其り情ふ見ふひのうれいと車成
其誕生の年月いらに夫婦答て其嬰兒の守袋中ら記せるおく慶雲二年
巳巳四月十五日ら僧正ふれ成聞て扱ふ我父母おうん且い歓び且ふ歎ら人
共い小御車小乗て御館舎ら伴ひの其比貴賤ふれ成傳聞て油と綾うね

をおろがみ　帝あやしび給ひ問ひ感涙と催し即詔有て本領安堵の官符を賜ひ又相州由井里小むら〻の館を造つて遠近の親族聚りてむつまじの春小過おもちていやしき故郷おもわすれ相州小赴きめし由井よりうつり靈光赫々たり即僧正坐禅石窟に入定し給ひし跡に社を建て安置し又擬本ありく一躰の尊容を彫像今の本堂奥に不動明王の石像の不動尊出現し給ひし山峯高くそびえ清泉湧出一流の龍泉湛々として落ちくる一流と祈り更に大巌頭より金色の石像の不動尊出現し給ひし山峯高くそびえ清泉湧出一流の龍泉湛々として落ちくる今の二重の龍あらし即青龍権現と祀て祠を傍に建て當山開闢の靈應ぬ　帝小奏し給ひ叡感斜ならず総房相三国の中小くの寺を領せしめ給ひ若干寺領ありて其倫首ぬ賜ふ　其より伽藍壮麗小して平九院の坊舎小香煙の白雲小靡々たり　盖悉天下の祈禱として僧正明王の尊前小三七日小六波羅蜜の法施小満願の日明王一偈を示して曰

當来導師慈氏尊　法華尓生未生名　良辨
我山建立作佛事　法衆生施安樂　此地清浄為結界　迷多衆生不来住
東南西限十八町　是山五佛表形像　我形像作為奉尊　大明王當守護
一度参詣得壽福　家内安穏無諸病

當山金堂の龍の谷小大蛇あり氏法小良辨一七日加持しめ給ひ大蛇現〻て忽ち氏山法守護者と成て五濁の塵小交り法性の暁法見ざる色〻蛇身小ありける今僧正の法施小よりて都率内院小生れ後當山小跡法垂て永守護神と成て法と魔障をる者法事〻ごとく云終て見ず　双上當山寺記の抑氏山より相州当の高嶺小一支小雨氣絶え故小雨降と山鳴とせり山禁より頂嶺まで嶮々そうして歩行難く双〻踏そう左右小民家相連り其中小當山の御師の家多く諸國小檀那と持て家々神札と配るいや〻をそ神をも阪径崔嵬うして雲小連り霞小封じ毎歳六月廿七日より七月十七日

御版行書集註　全部　廿六冊
四書直解　同　二十冊
同新增大全　同　廿二冊
五經大全　同　一百廿七冊
易經直解　同　十冊
詩經集註頭書　同　八冊
同　說約　同　十四冊
書經集註頭書　同　六冊

帝範　同　國字解　二冊
君體　建親　求賢　審官　納諫　去讒
誡盈　崇儉　賞罰　務農　關武　崇文
臣軌　同　國字解　二冊
同軌　至忠　脩道　公正　匡諫　誠信
慎密　廉潔　良將

帝範十二章臣軌十章ハ君臣主從ノ道ヲ明セリ故ニ繙紳家必ズヨロシクヨムベキ書ナリ鶴鳴先生意ヲ盡シ詳ニ片假字ヲ以テ注解シタレバ貴賤ニヨラズ必ズ讀テ有益ノ珍書ナリ

近思錄　大本大字　小本　四冊
同　無點　同　六冊
同　頭書　同　五冊
同　說畧　同　四冊
同　備考　同　四冊
續近思錄　同別錄　同　四冊

小學　道春點　山崎點

孝經大義　大本大字　小本　三冊
古文孝經諺解　二冊
忠經詳解　同

忠經孝經ノ二書トモニ貴キコト皆人ノ知ル所ナリ而ルニ漢文ノ解シカタシ今國字ヲ以テ童蒙ニモ分リヤスキヤウニレヲ精注セリ敬テ此ノ忠孝至誠ヲ存シ玉ヘト至禱ス

古文　前集　後集　各大本小本　八冊
古文眞寶諺解鶴鶴鈔　同　廿冊

古文眞寶ハ諺ニ注解ヲ直評割ヲ加フ實ニ古文註疏ノ第一トス

御書物所　京都三條通堺町
出雲寺松栢堂